

504

184



始



3.1.16

704-184



イ
ナ
と
イ
エ
ス



はしがき

私の恩人であり知己であつた故エチ・エチ・クツク氏がある時私に向つて「此頃毎夜一章づゝ娘達に読んで聽かせて居りますが、彼等は深い興味を以て章の終るのを惜み、次の夜を楽しんで待つて居ります」と曰つて示されたのが、此書の原著「The Prince of the House of David」By J. N. Ingraham でありました。

此書は埃及アレキサンドリヤに住む一ユダヤ人の娘が、教養のためエルサレムに遣られた時、恰もバプテスマのヨハネ及びイエス・キリストの出現に逢ひ、夫からイエスの最期迄を親しく見聞して、其異常な事實を父に通知する所の、卅九回の書面になぞらへた一個のキリストの傳でありますが、著者の該博な聖書地理歴史の知識と、豊富な想像とによつて、極めて趣味多くイエスの生涯を述べてあります。

■ 補譯はシカゴ、クツク社版のものを臺本とし、アスター文庫中のものを對照し、前者に省畧された所を後者から補ひ、殆ど全譯に近い物としまして、夫を私の編輯して

居る『兩羽の光』紙上に連載し、地方の讀者から歓迎を受けて來た物であります。我國には數種の基督傳が出版されてありますが、之は確に特別の長所を有つ物であつて、信者、求道者には勿論、一般の讀者にもイエスに就いて何物かも興へ得ることゝ信じます。唯譯者の貧弱な語學の力が原著者と讀者とに背く所の少くない事を、心竊に恐れて居ります。

千九百二十一年入梅の日

譯者 門馬生

第 1 信	一
第 2 信	八
第 3 信	一九
第 4 信	三〇
第 5 信	四四
第 6 信	六六
第 7 信	八〇
第 8 信	九一
第 9 信	一〇一
第 10 信	一一一
第 11 信	一二九

第	第	第	第	第	第	第	第	第	第	第
33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23
信	信	信	信	信	信	信	信	信	信	信

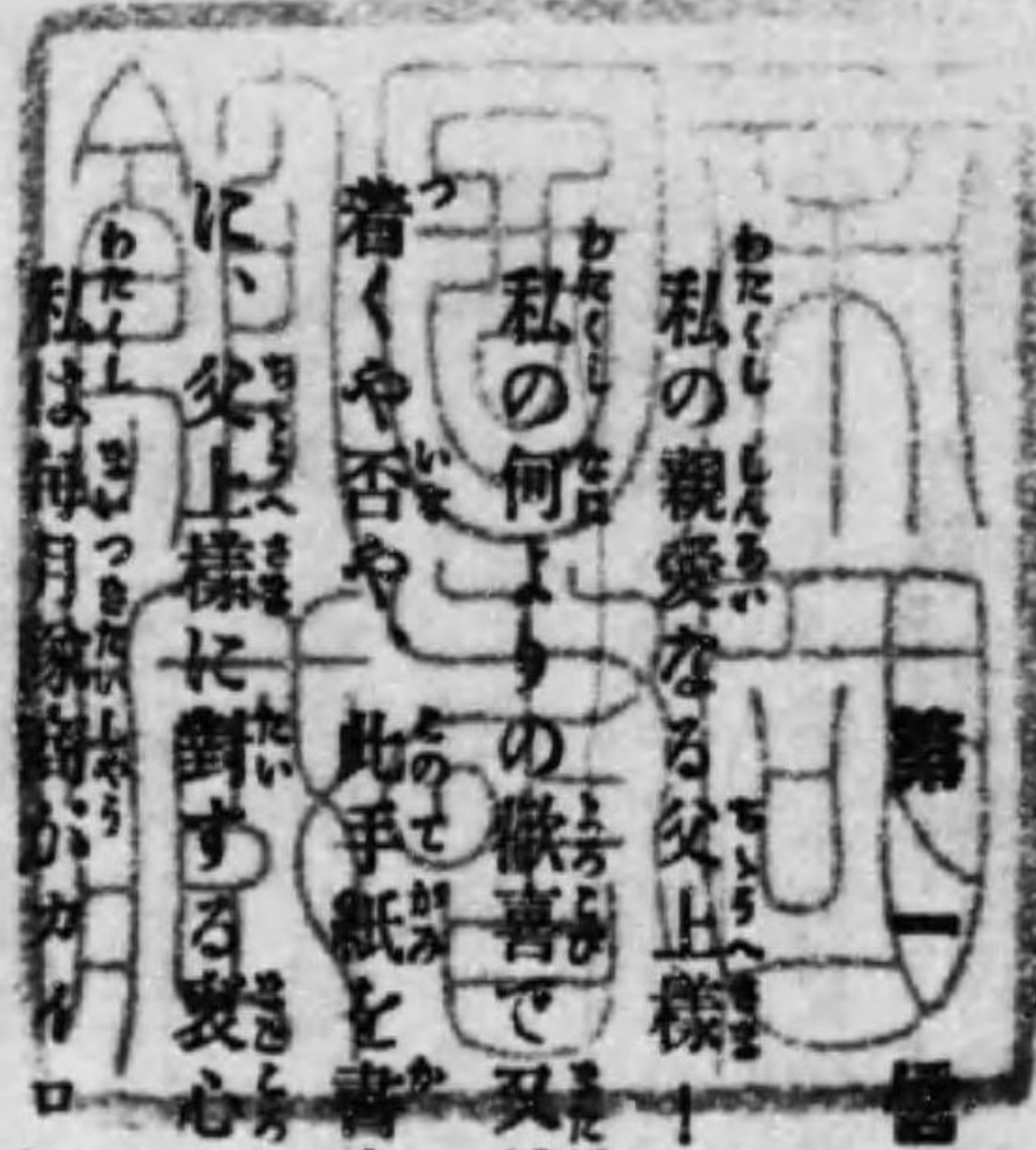
三六〇	三四四	三二八	三一五	二九七	二九〇	二七七	二六九	二六五	二五六	二五一
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

第	第	第	第	第	第	第	第	第	第	第
22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12
信	信	信	信	信	信	信	信	信	信	信

二三七	二三六	二一五	二〇三	一八九	一八〇	一六九	一六〇	一五二	一三九	一三〇
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

第 第 第 第 第 第
 39 38 37 36 35 34
 信 信 信 信 信 信

四三二
 四二四
 四一一
 四〇二
 三八六
 三七三



私の親愛なる父上様

私の何よりの歡喜で又第一の義務は、埃及を發つ時の御言葉に従ひ、エルサレムに着くや否や此手紙を書く事でありませう。此手紙は私の無事到着を御知らせ申すと共に、父上様に對する衷心よりの孝順を證明致すでせう。

他に好き機会がありませうならば、できるだけ屢々消息を送つて、遠き所に寂しく在し給ふ父上様の御心を慰め申したいと思つて居ります。

私は大層長い旅行を致しました。ラビ、ベン、イスラエルは十七日間を費したと申

して居ります。私も最初の十日間は數へましたけれど、餘り煩はしいために其後日を數ふる事を止めました。途中の三日間は海上の航海に過ぎました。地の上に蒼穹を展べたやうな莊嚴な海の眺望は此上なく私の心を喜ばせました。私は又幸運にもシドニヤカイロを指して航く羅馬の櫓船を見ることができました。父上様の在ます埃及を指して航くらしい一艘には私の祈禱と希望とを托言けました。

海に別れて荒野に向はんとした時に、私達は一艘の難破船を見ました。黒い大きな船體が沙地に横はり、全く望みなげに見ゆる状態は、海の怪物が陸地に押上げられて死んで居るやうに思はれ、惘然な感を催しました。其船はアレキサンドリアから来て、穀物を積んで伊太利に向はうとした時に、暴風のため岸に打上げられたといふ事であります。海上の暴風は眞に恐しうございます。聊の恙もなく航海を終つた私達は何といふ幸福でせう。

私は鯨を見たいと望んで居りましたが夫はだめでした。今や彼等はジブラルターの彼方に去つて、地中海には姿を見せないさうであります。私達がガザに三日間滞留り、

夫からサムソンが壊したといふ門に入りました。其處から一里程南の方にサムソンが門を除去つたと傳へらるゝ丘が見えました。其他彼がベリシテの軍勢を破つて多くの人々を殺した所や、名高い謎の材料になつた獅子の現れた洞などを示されましたが、何れも面白く感じました。

十人の兄弟が其弟ヨセフを投込んだ空戸や、彼等が弟を賣つて受取つた銀貨を並べた石なども、アラビヤ人の案内者から示されました。彼は私達の貴き祖先が彼等の祖先に買はれた奴隷であつたことを、誇張して語るものでありました。私は旅行中、エドムのイシマエル人がイスラエル人の擯斥に對して、其種族の地位を高めんとするが如き態度を見ました。私達がイサクの井の邊に天幕を張つた時に、隊商の首なる白髮の老人アベン、ハツサクはラビ、ベン、イスラエルに向つて、イサクは婢の子で、イシマエルこそ眞の繼嗣であつた。然るに彼は其子を繼嗣にしやうといふ婢の惡計のために追出されたのであると論じて居りました。然し私は十分先祖の歴史を學んで居りましたから、アラビヤ人は皆彼等の首長に賛成しましたが、私はかゝる愚しき物語に注意

を拂はず、博學なるラビが熱心に説く所に満足して居りました。

旅行の最終の日、遙東の方にソドム、ゴモラの湖を認めました。其時私は神の怒りの昔語を憶ひ出して心臓の鼓動を高めました。一天火を以て蔽はれ、大なる爐から火炎と黒煙とが降つて、世界第一の美しき園と呼べる、廣野の焼滅ぼさるゝ所を想像して見やうと思ひました。然し今は何たる静穩でせう。鈍色したる湖水は晴れた空の下に静に湛へて居ります。やゝ暫時種々なる思ひに耽りながら眺めました。其水の方から白銀の糸を伸べたやうにヨルダン河が輝いて居ります。

此悲しい湖水の眺望を捨て、數時間狭い谷間の道を辿りますと、突然地から湧いたやうに崇高いエルサレムの都が眼前に現れました。私達はなほ目的地よりは一里も離れた曠野の中にありましたから、ゆくりなく此光景に接した時には非常に驚きました。

父上様よ、此の聖き都に對する最初の印象は到底言葉に盡されません。かうした感情は我國民の數百萬人が等しく経験した事です。神と偕に歩める凡の大人物や、過

去の凡の歴史が胸に浮び、驚くべき力を以て私を壓迫しました。聖所に對する全歴史の記憶が喚起され、古神が燃ゆる火炎の中に現れて、親しく聖旨を宣給へる神殿を仰いだ私の頭は、何とも知れぬ畏さに打たれて自と低れ、深い虔みを以て拜みました。(あゝ何故神は此地と聖き家とを訪ひ給はぬようになつたのでせう) 私はみ空に立昇りゆく夕の犠牲の黒煙を仰ぎ、父上様と私とのために献ぐる祈禱を受け給へと祈りました。

都に入るや幾多の興味ある場所を指示され、之迄たゞ敬意を以て讀んで来た預言者の事どもが特別の親みを以て私の心を捉へ、恰もイザヤやエレミヤと同じ時代に居るような心地が致しました。エルサレムに着いてからの三日間といふものは、私は聖書の記事と面のあたり見る光景とを對照し、聖い敬虔と深く歡喜とを以て心を満たされながら、全然過去の生活をして來た。父上様も曾て同じやうな御経験をなされし事でございますから、私の心中は十分御了解の事と思ひます。

私達の都に着いたのは夕方六時前でしたが、程なく親戚のレビ人ラビ、アモスの

宅に入りました。私は遠い國から歸つた大切な娘のやうに歓迎せられ贅澤を極めた美しい室を興へられました。當家の人々の御親切に酔はされ、自宅を忘れはしまいかと心配して居ります。ラビ、アモスと其家族の人達は皆父上様に宜しうと申して居ります。アモスは神殿の御奉仕に出て居られますから多く話す折はありませんが、大層慈悲深い御方のやうに見え、御子様方をば非常に愛しまれて居ります。

私は一度神殿に詣りました。其外庭は犠牲の動物を賣る人々が群がつて、恰も隊商宿か動物市場のやうな状態でした。一方には數千の鳩を大籠に入れて賣つて居り、他方には小牛や小羊などの小舎があり、其鳴聲、嘶聲などの騒がしさ、到底神殿の側とは思はれませんが、父上様よ、此の如く神殿を用ふる事は、先祖の誇であつた神殿に對する敬虔の念の薄らいだ證據ではありますまいか。

祭壇に獻ぐる動物市場を通りぬけて、婦人の廊に達しましたが、其結構の美々しさ神々しさに打たれて、私は至聖所の方に向つて低頭しました。私は此時ほど神の御側近くある事を感じた事は今迄ありませんでした。香の煙は群衆の上に立昇り、大理石

の燔祭壇の階段には血の河が流れて居ります。あゝイスラエル人の罪のために、いかに多くの罪なき小羊の血が朝夕に流された事です。いかに長い間血の雨が注がれた事です。罪なき小羊が私達の犯した罪を贖ふとは何たる恐ろしい秘義です。之等の犠牲には私達の未だ悟らない深い意味がこもつて居るのではございませんまいか。

神殿よりの歸途、門の外で何かたゞならぬ事のために急いで往くらしい群衆と逢ひました。夫は神の眞の預言者と信ぜられて居る或人を見るためである事がわかりました。彼は東の方六七里を隔てたヨルダンに近い荒野に於て、エリヤ、エリシヤ以來聞かぬ事のできなかつたやうな能力を以て説教をして居るさうです。エルサレムからは日々數萬の人々が荒野に往つて彼を見、彼の説教を聴いて居るやうです。彼は荒野の洞穴に棲み、蝗と野蜜とを食物とし、駱駝の毛衣に皮の帯をし、極めて簡素な生活をして居るとの事でありませぬ。私は夫は神が再びイスラエルを顧み給ふ證據として遣られた眞の預言者である事を望みます。然しながら預言者の時代は遠く去りました。其人とても一の熱心家に過ぎないかと恐れて居ります。されども彼の感化は聞く所の凡の

人々に及び、或人は彼を眞の神の靈を受けた預言者と信じて居ります。さらば愛する
父上様よ、私達はイスラエルの光榮のために祈りませう。

貴殿の愛する アダイナより

第二信

私の愛する父上様！

「明日埃及に歸りますが、アレキサンドリアの御友達に何か御用はありませんか」とベン、イスラエルが申されました。私は手紙を彼に頼むよりは、私自身が彼と共に参り、父上様の御胸に縋りたうございます。然し御側を離れて當地に居る事は貴殿の御希望でございますから、私は自身の女々しい思のために御心を痛める事を慎みませう。

家庭を遠く離れて暮らす事は若い娘には眞にうら淋しいものであります。見るもの聞くもの、皆私の心に強く響きます。威ありて猛からぬ叔父アモス、イスラエルの眞の妻と申さるべき叔母リベカ、又従姉マリアなど何れも打揃うた親切の御方であつて、實に愛の家庭でございます。私は美しいナイルの河岸の家庭を離れて参りましたが、平和な聖所とも曰ふべき此家に居りましては、私達の先祖の神が、遠く故郷を去つた小さい者をも愛して下さる事を、深く感謝せずには居られません。

私達の住んで居る家は小高い山の中腹にあります。夕方屋上の庭園に登つて、遙なる故郷の空にかゝる星を眺めたり、或は眼前に廣がつて居る聖都を見渡したりして歩く事は、非常に愉快でございます。まばゆき大理石の壇や、銀の棕櫚の樹のやうな形して吹上ぐる噴水や、美しい壁や塔などのある神殿もよく見えます。

昨朝は、神殿の側から立昇る朝の燐祭の黒煙を見やうと思ひまして、昧爽に屋の上に登りました。静に神殿の頂上を凝視した時、モリアの山上の巨大な建築物を掩ふ森嚴なる沈黙の威に打たれて、虔んで跪きました。旭日はまだ昇りませんが、東雲や紫色ばんで、曉の明星が遠い空にきらめいて居ります。エルサレムの街々には静寂を破る何の音もありません。夜と沈黙とは一層神の祭壇と市とを嚴かに調和させまし

た。私も静に息を殺し、胸に手を拱んで頭を低れながら、敬虔の情に満たされて立ちました。人々が眠りに落ちて居る間、天の使の萬軍が此驚くべきダビデの都城を守るかと思はれました。綿毛のように東の空に浮んで居る白雲に、地平線下にある太陽が赤い光線を投げかけますと、夫はさながら燃ゆる船のやうに見えます。刻々暗黒の影が去つて黎明の美が翼を廣げます。モリアの山陰から昇る旭日を今かと待つて居ました時に、祭司達が神殿の庭で吹く銀の喇叭の聲が私の耳を驚かしました。あゝ何といふ朗かさでせう。朝の静な空気を傳はつて、家々の基礎をも揺がさんばかりに聞こえました。即刻凡の屋の上には禮拜者が現れました。エルサレム全市の人々は一人の如く其眠りより醒め、緊張まつた面を神殿に向けて居ります。暫時の沈黙の後、やがて第二の喇叭が響きました。夫が往昔私達の先祖モーセに語り給うた神の聲のやうに、殿肅に明かに聞え渡つた時、人々は跪づいて、其調に合せて朝の讚美を歌ひました。岸に打寄する大浪の如く、歌聲は神殿の石垣から反響します。かゝる嚴かな禮拜は、アレキサンドリアでは見た事がありませんから、私は非常に驚きました。讚美歌が最も高

調に達したと思ふ頃、神殿の中庭から黒煙が大きい柱をなして立ち昇り、其黒煙が中天に廣がつて、恰も銀糸の刺繍をした黒貂の毛の天蓋のやうに、神殿の上を掩ひました。見る間に其煙は高く／＼昇つて、密雲の上に達し、夫が又絶えず祭壇から渦巻いて昇る烟に補はれて、益々廣がつて往きます。私は畏み跪づいて神の御座へ昇りゆく香の煙に、父上様と私との祈禱をことづけました。

私達の宗教は何といふ不思議なものでせう。私達の祖先のため又私達のため、數百年間かゝる犠牲の祭を續けるといふのは何といふ奇妙な事です。罪なき小羊や山羊の血は如何して私達の罪を贖ふでせう。私は當地に来てから、幾度となく此事に就て考へました。之等の罪なき言なき動物と私達の間には如何なる秘密の關係があるでせうか。小羊は如何にして人の代りに神の前に立つ事ができるでせう。私は此恐ろしい問題を考へれば益々／＼わからなくなりす。ラビ、アモスに尋ねました所が、彼は唯微笑んで、彼が明年神殿の勤行に用ふる上衣の經緯の縫箔を急ぐやうにと申されました。

夕の燔祭の光景は朝のものよりも一層記述が困難であります。ギベアの山の彼方に夕陽の沈んだ時、シオンの南の望樓から長く尾を引いて喇叭の音が聞えます。其快い調子が門内の隅から隅に達しますと、凡の人は同時に労働を止めて丘の上の神殿を仰ぎます。片唾を呑んで待つて居る人々の鼓膜も裂けるばかりに、俄に幾千の喇叭の聲が雷鳴のやうに神殿から起つて來ます。祭壇の黒煙は殿かに立昇り、時としては夜の空氣よりも重い黒煙は幔幕のやうに低く垂れて、モリアの山を包む事もあります。然し清い香は其上を越えて神の御座へ翔り行き、憧憬に輝く無數の眼と祈禱とは其を追うて昇るのであります。やがて夕陽の明るみが全く消え、神殿の石垣に遮られた祭壇の火光は、道標にと打振る炬火の如く搖ぎながら、大小の塔に反映るのが見えます。

されども父上様よ、私は悲しい一つの出來事を御知らせ申さねばなりません。昨夜レビ人等の吹く銀の喇叭が鳴止んで、人々の心も眼も燔祭の香煙と共に神の御側を指して昇つて居た時に、此ダビデの市に近い羅馬人の城砦から、怪しげなる軍樂の音の

聞ゆるや否や、燔祭の黒煙の如きものが立昇りました。夫は羅馬人が彼等の偶像デユピターを祭るのだといふ事であります。あゝ、異邦人が自由に聖き都に入る時が來ました。エレミヤが其哀歌の中に、

「主その祭壇を忌棄て、其聖所を嫌ひ憎みて、其の諸々の殿の石垣を敵の手に渡し給へり、彼等は節會の日の如く、エホバの室にて聲を立つ。(二〇七)

と預言した日は來て居ります。父上様よ、私はこの手紙を認めながら、これらの悲き事共を思つて、羊皮紙の上に滴る熱い涙を堰止めかねました。神は何故敵を苦めないでせう、どうして尊きエホバへの犠牲の黒煙と憎むべき異教の神への燔祭とを共に行はしめ給ふのでせう。イスラエルは罪を犯し、私達は其罰を受けて居るのではないでせうか。私達の王は異邦人の僕となつて居ります。此國には私達の律法は行はれませぬ。私達の預言者は最早幻影を見ないでせう。神は怒りを發して遠く去り、撰ばれし國民と物言ひ給はぬのでせう。日々の犠牲の黒煙はエホバの怒りの雲の如く、神殿の上にかゝつて居ります。

彼の聖き若き預言者マラキから殆ど三百年を経ましたが、其日から神は彼の國民及び聖所と物言ふ事を止め、時を定めて行ふ祈禱にも燔祭にも注意の徴候を與へ給はぬやうになつたとラビ、アモスは申して居ります。されどもメシヤなるキリスト來給ふ時には萬物改まり、エルサレムの榮光は太陽の光輝の如く全地に滿ち、萬國の人々は世界の端より神を拜せんがために集うて來るであらうと話されました。私達は今罪のために雲の下に居りますが、榮光の日は近づいて居る、やがてシオンは全地の歡喜の源泉になると彼は信じて居るやうです。

羅馬の軍隊がダビデの城邑を占領し、私達の祭壇に近く彼等の偶像の祭祀をして居る事をラビ、アモスに話してから、私は預言者マラキの書を調べました所が、

『視よ我れわが使者を遣さん、彼わが面の前に道を備へん。又汝等が求むる所の主即ち汝等の悦ぶ契約の使、忽然其殿に來らん、視よ彼來らんと萬軍のエホバ云ひ給ふ、されど其來る日には誰か堪へえんや、其顯るゝ時には誰か立得んや、彼は金をふきわける者の火の如く、布晒の灰汁の如くならん、彼は銀をふきわけて之を潔む

る者の如く座せん。彼はレビの裔を潔め金銀の如く彼等をきよめん、而して彼等は義をもて献物をエホバにささげん。(三〇一—三二)』
とあるのを發見し、又、

『視よエホバの大なる畏るべき日の來る前に、われ預言者エリヤを遣さんと附加へてありました。』

今日之等の事をラビ、アモスのために讀んで居りました時に、ラビ、ベン、イスラエルは、明日當地を去ると申して告別に參りました。ラビ、アモスの面は曾てなかつた程悲しげに見えました。私は餘り無遠慮にして師の心を傷めた事を恐れましたが、御説しやうと近付きましたのを、彼は微笑みながら私の手を握られました。其眼から落ちた涙の珠は、長い白髯を滑つて私の手に碎けました。そして言葉柔かに、

『娘よ、御身は何も心配するに及ばない』
と申して更に客の方に向を換へ、

『ベン、イスラエルさん、預言者マラキの記した事は眞實でせうか』

と曰つてなほ悲げに歴山府の教師に話し續けました。

「神殿の祭司達の中で、腐敗しない者は極めて少数です。預言者の言は今日の事實に適中してゐます。彼の肥満つた祭司達は羅馬の偶像の僧侶よりも神の事を知らぬでせう。私は今日の同僚の者と神殿の祭壇の勤行をして居た時に、預言者イザヤが、
 「汝等の献ぐる多くの犠牲は我に何の益あらんや、我は牝羊の燔祭と肥えたる獸の脂とに飽けり、我は牝牛或は小羊或は牝山羊の血を喜ばず、空しき献物を持來る勿れ。我彼等を受くるに疲れぬ。我汝が手をのぶる時目を掩ひ、汝等が多くの祈禱をなす時も聞くことをせじ。汝等の手には血満ちたり。汝等己を洗ひ己を深くし、我眼の前より其悪業を去り、善を行ふ事を習へ」といふ言葉を憶出しました。此の嚴しい言葉は神殿に居る間斷えず雷鳴の如く私の耳に響きました。共に勤めて居た若い祭司達は私の面の悲しげなのを見て驚き、其理由を尋ねますから、天よりの聲の事を話しました所が、彼等も顔色を失うて戦慄しました。夫から私は彼等と別れて歸りました。」

ベン、イスラエルは之を承けて、

「私が若い頃エルサレムに居つた時に比べれば、神殿の儀式は非常に華麗になりましたが、敬虔の心は甚だ薄らいだやうです」

と曰ふと、アモスは憂はしげに、

「然です、衷に少しも敬畏の念がなく、徒外部を飾るのです。儀式を賑はす事を羅馬人からさへも學ぶけれ共、禮拜は無意味に墮落しました。内の腐敗をかくすために白く塗つた墓のやうです」

と申しました。

父上様よ、かゝる會話を聞いた私は、深い謙遜の心を起しました。私達にして若も眞の神を拜さないとしたならば何を拜しませう。何もないではありませんか。私達は彼の野蠻な勝利者よりも悪くなりました。彼等は少くも神々を有つて居りますが、私達には夫すらも無いではありませんか。あゝ、エルサレムの審判の時は近づいて居ります。主は試練者の如く俄に神殿に來給ふ筈です。其日は既に近づいた事を思

て、私は深い感銘を受けました。父上様よ、私達は多分此世に於て其日を見る事ができるかと思ひます。

此手紙を將に終らうとして居る所へ、マリアがヨハネを伴れて参りました。ヨハネは曩に祖國の自由の恢復を企つて羅馬人に殺された門閥の子で、今はガザ門の近傍に寡婦となつた母と共に住んで居ります。此の青年とマリアとの間の清い情愛は、日に日に濃かに進んで居ります。

私が前の手紙で申し上げた荒野の預言者の評判は益々高くなり、毎日數千の人々は彼のために引着けられて居ります。ヨハネは預言者の事を興味深く話しました所が、マリアは非常に心を動かさし、私にも聞きに往けと勤めて居ります。私は次の便で凡の事を御知らせ申させよう。父上様は研究好きな私の性質を御承知の筈です。私は飽くまでもアブラハムの神の寵者たる事を忘れず、父上様には敬虔なる情愛に富める娘たる事を忘れないでせう。さらば御健かにて。

ア
デ
イ
ナ

第三信

親愛なる父上様。

私は今朝、神殿に詣で、初穂の祭を見やうと思つて参りました時に、アントニアの塔の向の岩の上を掩ふ巨大な建物を認めました。夫は荒々しげに神殿を睨んで居るやうな形態をなし、其壁には無數に羅馬の鷲が彫刻してありました。私は之迄屢々父上様から此都城に就ての歴史的事實を承はり、深い興味を有つて居りましたが、今しも身親しく此處に臨んで居りますと、恰も父上様が側近く在して、事細かに御話し下さるやうに思はれます。四隅の塔は、曾て父上様が其北の一つに據り、少數の手勢を以て羅馬兵と戦はれた時のまゝに残つて居ります。然るに今や彼の野蠻人等は、自國の朝臣や兵士を集め、エルサレムの市民の耳にも聞ゆるやうに喇叭を吹鳴らして居ります。

羅馬兵が駐屯して以來、塔の周圍の美しい道は見る影もなく荒らされたさうでござ

います。私は心付きませんでした。私はオーニアと呼ぶ黒人の好隸を一人伴れて、高さ三丈もあるかと思はるゝ白い大理石の柱を以て屋根を支へられた寶物庫の廻廊の美々しさに見惚れて居た時に、城への歸りらしい二人の羅馬兵が、町の門の方から私に近寄つて來ました。其時オーニアは遠く離れて、私は唯一人でありましたから、被布を緊と被り、急いで彼等を通過ぎやうとした所が、兵卒の一人は私の前に立塞がり、被布を捉へて引留めやうとしました。其手を振もぎつて駈け出す所を、他の兵士に遮られました。私が周章叫んで迷惑ふのを上の城から見居た野蠻人共は哄と笑ひました。此の危機しも、彼方のシオンの岩に登る道の方から、逞しい馬に跨つた羅馬の一青年士官が參りました。彼は狼藉せる兵士を追退け、私を助けてくれました。彼は可重なる態度を以て兵士等の無禮を謝し、嚴重に處罰すべしと約束しました。彼はまだ廿歳を超えない青年ではありますが、其男らしい、禮儀正しい高雅な點は、深く私を感動させました。彼は馬から下りて手綱を執り、靜に歩きながら安全な地點迄私を見送りました。我國の儀禮に慣れた紳士にも劣らない此の青年士官に逢ふて

以來、彼の野蠻な國人に對して善意を有つやうになりました。彼は我國の人々の偏見を排斥する事や、其國の美しさ少女達や、學者や勇士や、全世界を支配する權能などに就き、驚くべき雄辯を以て話しました。

彼の最後の語は私の悲みを喚起しました。全地の面を支配する事は、我ユダヤに對する預言ではありませんか。彼の羅馬人と雖も我國民となるべき筈ではありませんか。父上様よ、之等の蠻人がユダの支族の正しき所業たるべき王權を執るを許されて居るとは、之は如何した事です。私はエルサレムに來てから、幾度となく我國民の墮落を思浮べました。エホバの敵なる偽りの神々の禮拜者が聖所に立ち、神が私達に與へ給うた權力を奪ふとは、之はどうした事です。

私は家庭に歸つて後、城中で逢うた危険のことから、談話は何時しか羅馬人の支配の問題に及びました。ラビ、アモスは私の逢うた青年士官を普通の羅馬武士として聞入れ、市民を苦めて喜ぶ羅馬兵の出沒する塔の近くに行かぬやうにと注意されました。

此手紙を書いて居た時に、市の大通の一であるベタニヤ門の外に、一騒動が始まりました。其光景を見た私の胸は、耻辱の感で塞がりました。夫は軍旗や鷲の像や喇叭や、又華麗に装ふた馬車などの行列が来たのであります。然し夫は往昔のイスラエルの王ダビデや、ソロモンの時代にあつた凱旋の進軍ではなく、羅馬の知事が通るのであります。彼は金銀を鑲めた軍用馬車に乗り、金モールのついた緑絹の椅子に悠然と凭れ、絹と羽根とを以て飾つた白い馬に牽かせ、前後を華美に装うた若い騎兵の一隊に警護させ、威風堂々と街衢を練つて行くのであります。其先頭には懶惰なピラトよりもなほ一層王者らしい若い士官が乗つて居ります。彼は昨日亂暴な兵士から私を救うてくれた青年士官であります。彼は格子の前に立つて居た私を見付けて黙禮して過行きました。此士官は高尚で儀容備はり、ユダヤ人としても愧づかしくはないと思ひます。若も不思議な神の攝理によつて、彼と再會の機會が有つたならば、悔改めて偶像を捨て、活ける眞の神に事ふるやうに導きたいものと思ひます。私は知事ピラトの風彩を好みません。彼は沈鬱な立派な面をして居りますが、餘りに肉的で又大酒家

らしく、又怠惰放逸を好み決斷力の弱い人間らしく見えしました。彼は羅馬皇帝の特別な友人で、其の偏頗な愛によつて當地の知事を務めて居るとの事でありました。然しながら私達の主としては、先日も一寸申上げた、愛國の至情から一揆を起したヨハネの父の如き優れた人物を殺した兇惡な前知事よりは、怠惰な食道樂者を有つ方が、寧ろ幸福かも知れません。

父上様は私が前の手紙に記した、彼のエリコの荒野に於て説教して居る新しい預言者の噂が日々／＼盛になり、夫がために一般人心が甚く昂奮して居るといふ事を御記憶でせう。彼はエリヤのやうな嚴酷な生活をして居ります。過ぐる三週日の間、市民の多くの團體が彼を見彼に聞くために参り、又多數の人々は己が罪を告白して、ヨルダン河で彼から洗禮を受けました。マリヤの従兄ヨハネも亦其受洗者の一人でありました。彼は聖い希望と好奇心とを満たして歸つて参り、而して神が再びイスラエルを記憶するため、和解の預言者を遣はし給うたと申して居ります。驚くべきはヨルダンから歸つて來たヨハネの容貌の變化であります。彼は陰鬱な柔和な青年でありました

が、今や其澄んだ眼は熱烈な希望に輝いて、内なる靈魂の新生を物語つて居ります。彼はヨルダンの預言者に就て、次のやうに話しました。

「市の門を出て、ケデロンの河と谿とを過ぎて往つた時に、私は偶然にも橄欖山の南から登つて来た大いなる團體に逢ひました。彼等は逾越節に遠くから出て来る我國の人々のやうに、老幼男女、皆籠に食物を用意して居ります。彼等も亦荒野の預言者に聞かされたに往くのであつて、口々に預言者の噂をして居りました。彼等の中には祭司、士師、サドカイ、バリサイ、エッセネの人々ばかりでなく、不信者さへも混つて居りました。

彼等は靜に歩いて居ましたから、私は急いで彼等の先頭を超越し、遂に丘の頂上に着きました。其處から遙にヨルダンの谷を眺め、更に三十哩の彼方にあるエリコの町をも想像して見ました。私は又聖都を見返しました。山々に圍まれて嚴かに立つ神の都の尊さ！過去のニルサレムの榮光の記憶は私の裏に甦へりました。されど榮光は今や消えて影だにもない。大厦高樓は昔ながらに美々しく聳えて居るが、其力は全く地を

掃うてしまつた。耳を時だつれば微かに羅馬の兵營から喇叭の音が響いて来る。あゝ往昔人々が神の聲によつて眼醒された其石垣の邊から、預言者祭司王達の墓の上を越えて、異邦の忌まはしい軍樂が聞こえ渡るとは！

曾てソロモンが第二のエデンの樂園を築かうとしたゲツセマネの園は私の脚下にある。而し其石垣は崩れ道は荒れて野犬の通ふ所となり、無花果樹、棕櫚、橄欖の木々のみ僅に彼方此方に残つて、「こゝには曾て美はしき園があつて、悲める人の心を慰め、惱める人の涙を拭ふたのであるが」と語つて居るやうであります。我國の詩人達は此の悲しい追憶を歌うて居ります。

私達は間もなく美しいベテバケ邑に着きました。其處の宿屋に休んで居る時に、エリコの方を指して彼方の坂路を登つて行く乗馬の一隊が見えました。追付いて見ると其中には私の知合の者も數人ありました。而して彼等も亦同じ好奇心を抱いて往くニルサレムの人々でありました。其中にはアリマタヤの富豪の青年ヨセフも居りました。彼はヨハネと呼ばるゝ野の預言者の中に、神の遣はし給へる者を見出さねば止ま

ぬといふ熱望を以て其胸を燃して居るらしく見えました。他の或者は商用のため、或は娛樂のため、或は單にユダヤ中の評判の人物を見やうといふ好奇心を以て行く人々でありました。アリマタヤのヨセフと私とは轡を並べて乗つて街く途中、目指して行く預言者に就て話しました。彼は野に叫ぶ人を眞の神の預言者と思ふらしく、聖書を引照してメシヤの來るべきダニエルの七十週が今や殆ど満ちて居る事を語りました。私は彼に向つて、若もメシヤが來給ふならば、必ずや王者の形を取り、全地を統治める權威を以て現はるゝ筈である。それが野獸の皮を着て荒野に叫ぶとは信じ難ひと曰ふと、彼は答へて、勿論夫はメシヤではあるまい、キリストは俄に神殿に現れ、私達は其處で逢ふ筈である。然し私の大なる希望はマラキの預言したる先驅者を見る事である。私は携へて來たダニエルの巻物と、荒野の説教者の言とを對照する心算である。而して私の驚く事は、七十週が満ちるばかりでなく、千二百九十日が終りに近づいて居る事ですと申しました。私達は互に新預言者の出現と預言との符合に驚き、喜びと恐とに打慄き、暫時嚴かな沈黙に落ちました。

ベタニヤ邑を通る時に、ヨセフは又も言を續け、其預言者が自らメシヤの先驅者と宣言して居るのに、其説教を聞いた人々の中には、エリヤが再び地に歸つたとか、エノクが天から降つたとか愚かしい事を云ふ者も多く、イザヤだと信ずる者も少くないと語りました。

かく話しながらベタニヤの丘を横切りました。當地には往昔善惡を知るの木があつた所とか、ヤコブが夢みた天の梯子の立つた所とかいふ傳説も残つて居ります。而して此山の眞上は神の聖座のある所であるから、復活の後には此處から第三の天に昇るのであると一般の人々は信じて居ります。

終日長い騎馬の道中をつゞけ、預言者に聽かうとして往く幾何かの團體を過越し、又彼の雄辯と智慧と能力との驚くべき噴をして歸つて來る多くの團體にも逢ひながら、遂にエリコの町の見ゆる所に來ました。町は羅馬の官吏達の愛する避暑地となつて居りますから羅馬風の塔や宮殿などで大層立派にできて居ります。終日荒れた秃山の間を乗つて來た私達は、鮮かな緑の谷の光景に接して、蘇へつたやうな心地をしめました。

町の一哩程此方に、王達の時代にエルサレムを再建したヒールの塔と家との廢址があります。其右方の野は、カルデヤの軍隊が私達の祖先を敗り、ゼデキヤ王を捕虜にした所でありますが、今は美しい緑の公園となつて、其木蔭には平和が宿つて居るやうに見えました。

此地方の地理に通じて居るヨセフは、アイの古址を示し、北の方一里にある丘を指し、ヨシユアの軍勢を潜伏させたのは彼處であると申しました。愈々エリコの町に達した私は、四十年間荒野を踏んで來た履の紐を直して、此町を七度廻つた先祖達の事を思出しました。大將ヨシユアが丘の上に立つて嚴肅なる進軍を指揮し、神の萬軍の喇叭が雷鳴の如く響き渡るや、誇りがに立つて居た町の石垣は崩れ落ち、立昇る沙煙のために満天曇つたやうな光景を想像しました。然しながら事實は全然相違して居ります。塔も城砦も夕日に映じて黄金の如く輝き、一片の浮雲もない碧空は、得も曰ひ難い壯麗さを現はして居ります。周囲の谷々はエホバの軍勢の関の聲を反響せず、遊樂の羅馬の士女に満たされて居ります。此日は恰もエフタの愛する娘の記念日であ

り交したから、エリコの少女達は雪白の禮服を着け、列をなして聖歌を歌ひ、道々に花を播きながら墓に詣でる所でありました。エフタは長らく此町に住み、其娘は此町で生まれ、此町に葬むられたのであります。

町の門で歩哨の羅馬兵に止められ、旅券を調べられ、又通行税をも徴られました。私達は明朝早くヨルダンの岸に出で、説教洗禮をして居る預言者に逢ふ計畫でありましたから、夜の間にエリコの町を通過しやうとしたのであります。

マリアの従兄の物語はなほ續きますが、餘り長くなりすから今回は之で筆を擱きます。私達は皆深い興味を以て彼に聞きました。彼は自身の實見を話したのであります。ヨルダンから歸つた彼の顔は一層晴やかで、眼はやさしく輝き、聲は音樂的になり、全性格の上に、柔和と、知慧と、可憐と慈悲とが増したやうに見えました。次の手紙で彼の物語を續け、全體を終つた後、私の思ふ所を申上げたいと存じます。神の祝福父上様の上に豊ならん事を。

第四信

親愛なる父上様。

御手紙に由りて御近況を知り、又何時も變らぬ御情愛を味ふ事のできましたのは、この上なき喜びでございました。御手紙と共に忠實な僕エルクに御頼みになつた貴い愛の賜物をも確に頂きました。私は夫を善き父を有つた娘の誇を以て身に着けたいと思つて居ります。

父上様、新しい教のために私の信仰の動される事については御心配に及びません。信仰の冒險は決して致しません。凡の事御意見を伺ひ、いやが上にも慎重な態度を取りますから何卒御安心下さいまし。私は御言葉に従ひ思ふ通りに認めました。私の質問は疑惑から出たのではなく、眞理を究めんとする所から發した事も御承知でせう。父上様は我國の律法をよく御存知でありますから、私が當地に於て見た所、殊に禮拜と神殿の儀式に關しても十分に御答へ下さる事と思ひます。

私は前の手紙で（夫は數日中に御手許に届く筈です）マリアの従兄ヨハネが、親しく往つて見た荒野の預言者の事を御知せ申上げました。私は彼の曰ふ通りに信じやうとは思ひませんが、其中にある眞理を見付けたいと思つて居ります。

父上様は、誠實なる研究のために、モーセの律法の無瑕や、神殿の禮拜や、預言者の教やは、其基礎を動かさるゝを恐るゝ必要は毫もない。之皆眞理の上に立つて居るものであるから、永遠に残るものである。イスラエルの宗教は何等の質疑をも恐れない。然し御身がもし宗教上の事を求めるならば、夫は皆神に屬する聖事であると思ひ、敬畏と謙遜とを離れてはならぬ。預言者の成就の日を知るために預言を研究する事は適當で又必要である。私は御身と遠く別れて居るから、所謂荒野の預言者に就ては何とも判断ができない。御身の算へたやうな神殿の禮拜の墮落や、シオンの山に於ける羅馬人の偶像禮拜や、祭壇の汚瀆や、異教の律法がダビデの王國を支配して居るが如き事實は、預言成就の日の近づいた事を語るかとも思はれるから、よしやイザヤの示した日が満ちたとしても少しも驚かない。よらば我娘よ、我等打たれた國民のために約

東の救世主の臨り給ふやうに祈らう、我等はヤコブの星が高く昇り、正義の王たるべき平和の君が現はれて、其廣大なる王國の中にイスラエルの頭を擧げさせ、萬國を統治さしめ給ふ日の來るやうに祈らう。我は日々エルサレムに向つて、我目がイスラエルの希望とシオンの偉大なる榮光を見得るまで長く生きん事を祈つて居る」との御言葉は、私に強い確信を與へました。

父上様の御言葉は私に勇氣を與へました。私は預言成就の時が日に／＼近づいて居る事を信じます。或は私達の信じて居るより早く來るかも知れません。もし私が預言者に聞くためにヨルダンに往つて來たヨハネの物語を終つたならば、私が希望と確信とを以て語る理由も御解りになり、此の悔改めの説教者は偽りの預言者でない事も御承認下さるだらうと思ひます。

「私達は未明に起出でました」とヨハネは興味ある實見談を續けました。「其時既に町の四分の一は睡いで、私達と同じ目的の下に動いて居りましたから、容易に東の門に達する事ができました。異邦人の門衛のために殆ど半時間も留められて居る中に、街

路は無数の群衆を以て充たされ、互に踏合ふ程の混雜となりました。怠惰なる門衛の長は、悠然と起出で、から念入りで面や手足を洗つて朝食を認め、夫から漸く門を開かせました。私達は此の如き主人の僕であります、あゝ然し「汝の門は常に開きて夜も日もとぞす事なし、こは人諸々の貨財を汝に携へ來り、其王達をひきゐ來らんがためなり」とイザヤの預言した日は遠からず來るであらう。

アリマタヤの友人と私は群衆から少しく離れてエリコの町を出で、約一里を隔てたヨルダンに向つて廣野を横切りました。朝は頗る静和で、太陽は凡て生物に喜びを與へ、草葉の露に日光の映じた所は、恰も數千のダイヤモンドを播散らしたやうに見えました。初は麥畑の間の細道を辿りましたが、程なく廣野にさしかゝりました。其邊には小さい野驢馬の群が元氣よく頭を伸べ、物珍らしげに私達を見て居りましたが、やがて羚羊のやうな速度で南の方に走り去りました。人々の黒い線が斜に廣野を進むのを見て、預言者の居る方向を知り、遂にヨルダンの岸に立つて居る彼を見出ししました。

夫はエリコとは反對の側にある、ベルベック、アツシリアに通ずる隊商の道路であつ

て、先祖達が捕虜として引行かれた所でありませう。あゝ其道路は我國の王達の涙を以て濡されたのであつた。私達は悲痛の感に打たれながら眺め、又エホバが怒りを止めて、残れる人々を顧み給はん事を涙に咽びつゝ祈りました。ヨルダンの淺瀬に程近く達した時、預言者に聞くために群衆が川縁に黒山を造つて居るのを見ました。川岸を辿つて居る中に、水の中に石を組立て、造つた柱が目につきました。ヨセフは夫を指して、之はむかしイスラエルの人々がヨルダンを越えた時に、記念のために積んだ十二の石である。彼等が渡つた時此處は乾いた地となつたのであつたと話しました。其石は九個しか残つて居りませぬ。私は先祖達が此川を渡つて、共に此石の上に手を按いて以來の幾變遷を思ひ廻らしました。士師、列王の時代の後、戰敗れて異域に俘囚となり、歸つて來ればヘロデは羅馬帝國の權威を以て私達を支配して居ります。あゝ、ユダは永劫彼等の權威の下から脱する事はできないであらうか』

と、ハヨネは憾めしげに附加へました。從姉マリアは快活に、

『其中にメシヤが参ります』

と叫びました。ヨハネは又、

『然です、ユダは高く擧がる前に、最も低く歩まねばならぬ。メシヤと共にユダの榮光は全地に滿つるでせう』

と、其眼を希望に輝かしながら、又も話しつゞけました。

「彼の立つた川岸の小高い丘を、群衆の黒山が圍んで居りましたから、私達は餘り近寄る事ができませんでした。全會衆は疑と目を彼に注ぎ耳を峙て、居ります。豊かな音調の説教は遙離れても明亮に聴取られました。彼はまだ卅歳を出でないと思はるゝ青年ですが、櫛を入れない長い髪を頸の周りに自然と垂れ、寛かな駱駝の毛衣は着て居りますが、兩腕は肩まで露出して居りました。其態度は高加索の戰士のやうな威風を備へ、而も其身振は溫和親切で、鋭く響く雄辯の中には、深い熱情と謙遜とがこもつて居ります。彼はメシヤを題にして説きました。

『あゝイスラエルよ、主たる汝の神に歸れ、汝等は自身の不義のために衰へたのである』

と彼は前からの説教を繼續し、

「御言葉を守り主に従ひ、彼に向つて我等の不義を許し御恵みを垂れよと祈れ、見よ汝等の叛逆を醫やす主が來り給うて、豊に汝等を愛し給ふであらう。彼はイスラエルに向つて露の如く下り、百合の如く育ち、レバノンの如く其根を下すであらう。彼の枝は廣く張り、其美は橄欖の木の如く、其果は萬國の民を癒すであらう。彼等は歸りて其陰に住まひ、放たれた人々は彼の名を呼んで彼の他に主がないと云ふであらう。」

私達はユダの家々が空しくなるまで多くの人々を荒野に引寄せて居る人の唇から洩る一語をも聞落すまいと、つとめて預言者に近い場所を占めて居りました。此時私の近くに立つて居た一人が、

「彼は誰の事を話して居るのでせう」

といふと、傍の人は雜誌に注意を妨げられるのを不快に感じたやうに、

「勿論メシヤの事です、何卒御靜に、話を聴けば解るのですから」

と答へました。預言者は銀の喇叭のやうな聲で話しを進めました。

「主の日は來ました。汝等シオンに於て喇叭を鳴らせ、見よ、主がユダの俘囚を還らす日が來ました。畑は色づきました、鎌を入れなさい。主がシオンから叫びを擧げ、エルサレムから聲を發し給ふ日が近づきました。」

或人は聲高く

「汝はエリヤですか」

と問ふと、彼は答へて、

「聖書に記されて居るやうに、私は主の道を直くせよと叫ぶ野の聲です。主の日は近づきました。私は主の道を備へるために遣はされた傳令者にすぎません。」

彼の近くに居た一婦人は、

「汝はメシヤではありませんか」

と問うて、跪づいて拜さうとすると彼は夫を押止め、深い謙遜の面持で、

「私の後に來る者は、私に優る力があります。手には箕を持ちて其禾場を淨め、麥

を飲めて其庫に入れ、糠は消えない火を以て焼くでせう、されば汝等悔改めて罪の赦しを得るためにバプテスマを受けなさい。今や斧は木の根に置かれてある。善果を結ばない木は斫られて火に投入れるであらう」と警めました。

群衆の中には好奇心を満たすために来た羅馬の兵士や、サマリヤ、ダマスコから来た者も混じて居りましたが、或利未人は、

「主よ、汝は私達のために御話しなされるのですか、また異邦人サマリヤ人のためですか」

と問ひますと、預言者は嚴肅に、

「往きてエルサレムの人々の耳に叫びなさい。我民は二つの悪事を行ふた。即ち活ける水の源泉なる我を捨て、自ら水溜を掘つた。而し夫は壊れたる水溜であつて水をもたないものである。然るに汝等イスラエルは罪なしと云ふて居る。汝の罪は汝を正し、汝の叛逆は汝を責めるであらう。汝等は此國を汚した。速に悔改めて夫

に叶ふ行ひをしなさい。止めよ、止めよ、汝等の惡しき業を止めよ。虚偽の言を信ずる勿れ、あゝ主の神殿！ 汝等は夫を盜賊の巢とした。されば汝等の犠牲は主の憎み給ふ所である。」

之を聞いて居た祭司は怒りと耻に面を赤らめ、

「主よ、夫は私達祭司の事ですか、私達は盜賊ではありませぬ、」

若い預言者は更に躊躇する所なく、恰も神御自身が私達を畏怖せしむるが如き言葉を以て語りました。

「主はかく申されます。我羊を傷む牧者に災禍あれ、我汝等の惡しき業に報いるために往かん、黄金は光を失ひ、精金も昏くなつた。貴き金にもくらぶべきシオンの子等は卑められて居る。彼等の祭司は雪よりも清く、乳汁よりも白かつたのに、今や其姿は炭よりも黒くなり、灰を以て我國の子を養ふて居る。預言者の罪と祭司の不義のためにシオンは禍である。汝等エルサレムの大路を走りて眞理を求むる者ありやと尋ね見よ、彼等主は活くといふとも夫は虚偽である。オ、祭司等よ聞け、イ

スラエルの家よ之を聞け、汝等不義なる祭司の上に災禍あれ。我はエルサレムの預言者達の恐ろしき業を見た。彼等は偶像を拜み虚偽を語つて居る。汝の神の律法を忘るゝ者は祭司ではない。今や地は歎き、其中に住む凡の者は衰へ果てた。世には眞實なく慈仁なく、神を知るの知識なく、嘲る者、誹る者、殺す者、偶像を拜む者が充て居る。汝等祭司の上に災禍あれ。」

之を聞いた利未人達は大に怒り、荒々しく地を踏んで去りました。彼等は預言者の失敗を望んだが、群衆は彼の言を信じて居りますから、如何ともする事のできないのを無念に思つた。

利未人が呟き去つた後にエルサレムの富める官吏は、

「祭司でない私達アブラハムの子孫は、アブラハムに依りて救はれませうか。」と問ふと、若い預言者はかく曰ふた老人の方に向ひ

「汝等我等の先祖にアブラハムありと思つて油断をしてはならぬ」と曰つて足下にある小石を指し、

「神は此石をもアブラハムの子とならしめ給ふ。義き業をなす者はアブラハムの子である。されば汝等も悔改めよ、悔改めて善果を結べ！」

群衆の中にあつたサドカイ、パリサイの徒輩の中に、預言者の言を喜ばないで呟く者もあつた。彼は火焰の如な一瞥を彼等に與へ、其心中を觀破して叫びました。

「オ、蝮蛇の裔よ、誰か汝等に來らんとする怒りを避くべき事を告げたか、其日には彼爐の火を以て清むる者の如くに來り給ふであらう。されば汝等も悔改めに叶ふ果を結べ。救はれんがために其心を惡より洗へ、」

群衆の中には美しく装ふた富豪の娘達も交じつて見えましたが彼は、

「汝等エルサレムの娘達も亦悔改めなさい。いかに金銀珠玉を以て外部を飾るとも、そは空しきことである。審判の日來らば、シオンの娘達は自らの不義のために、手を上げて泣き叫ぶであらう。悔改めなさい、神の國は近づいて居る。」

彼は斯く夫々の階級に警告して後更に一同に向つて叫びました。

「主は仰せ給ふ。我は汝に近き神である。汝等最高き者の音信を聞け、其日至らばエ

ホバは再び地に臨み、彼の造れる者と面を合せて語り給ふであらう。見よ。其日は近づいて居る。我はダビデに義の枝を擧げしめ、彼をして世を統べしめるであらう。主は曰ひ給ふ、見よ其日は近づいて居る。ユダは救はれ、イスラエルは安きを得るであらう。我は彼等の上に牧者を置き、豊に彼等を養ひ、缺くる所なからしめるであらう。』

『エルサレムよ、我汝の石垣の上に斥候を置き、終日終夜たえず黙す事なからしめん。あゝ汝等渴ける者ごとく水に來れ、金なき者も來るべし、汝等來つて買ひ、求めて食へ、來れ、金なく價なくして葡萄酒と乳とをかへ、』
かう曰つて彼はなほ言を進め、

『新しき歌をエホバに向ひて歌ひ、地の果より彼を頌めよ、天と地と其中に充てる凡の物を造り、之に呼吸を與へ靈を注ぎ玉ふた主なる神かく曰ひ給ふ。我選べる僕達を見よ、我は彼を喜ぶ。我エホバ公義を以て汝を召し、汝の手を支へ、異邦人の光明となり、盲人の眼を開き、俘囚を獄より放つ所の約束を與へる、又我彼を我が長

子となし、地の王達の上に置かう。彼を見よ、さらば救はれん、地の果に至る迄凡の膝は彼の前に屈み、凡の舌は彼に誓を立てん、我等を贖ひ給ふもの、萬軍の主、其名はイスラエルの聖者である。』

と説きました。火の如き熱心な彼の語は、聴衆の鼓動を高めました。

此の力強い預言者の説教は實に匹儔なき形をもち、彼が引照する預言者の語は太陽の如く輝きました。私はもしやメシヤは居ないかと周圍を見渡した程でした。彼の説教の終つた時、驚きと畏れとを以て石の如く黙然と立ちました。程經て彼は丘を下り川畔に往つて『清い心を以て主を迎へんがため、赦罪のバプテスマを受けたいと欲ふ者は此處へ』と招いた時に、數千の人々は我先にと争ふて彼に従ひました。私も其中の一人でありました。彼にしかと手を握られた時には、心は雀躍りしました。其日自己の罪を告白し、ヨルダンでバプテスマを受けた者は千人以上でありました。受洗者の中にはバリサイ、サドカイ、教法師、宰などもあり、又白髮の羅馬の老兵もありました。アリマタヤのヨセフは、十分研究して後にと申して、バプテスマを受けません。

バプテスマが終つてから全群衆は團體をなして別れ去り、預言者は涼しい夕方まで荒野に退いて、蝗と野蜜の食事をするのであつた。

彼が再び現はれた時、群衆は又加はりましたから彼は第二回の説教を始め、前よりも更に明瞭にメシヤ出現の曉まで、彼の與へられた使命に就て語りました。

父上様、以上ヨハネの實見談で此の長い手紙を結びませう。私は別に説明は致しません。唯終りに臨んで一言、私の期待が益々強く眼覺めて來た事、又多くの人々と共に、近くメシヤの來り給ふのを切に祈つて居る事を申上げて置きます。

貴殿の娘

アデイナ

第五 信

親愛なる父上様。

前の手紙を差上げてからまだ漸く三日を過ぎましたが、目下エルサレムの人心を變動して居る非常の事件について、父上様に相談致し、御判断を乞はね

ばならぬやうになりました。マリヤ從兄の預言者訪問談の中、先日書残した點の中で、深く私を感動させ、その預言者の言を眞理として信じたに程になりました。かく申上げた丈では御解りになるまいから、父上様の公明なる御判断を乞ふために、左に其青年の物語の殘を認めませう。

「預言者は第二回の説教の後、夕日に照り映ふヨルダン河で二百人程に洗禮を施し、夫から宿や食物やを求めるために人々を去らしめました。食物を携へて來たのは特別に熱心な少數の者のみでした。人々は其處を去る前に、彼から愛の祝福を受けるために近づきました。其中には彼が神から受けた使命を承認するかの如く、杖に凭れて銀のやうな白髪を若い預言者の前に垂れる老人のあるのを見て、私は得も困難い印象を受けました。母親達は其幼兒を伴れて來て彼の祝福を願ひ、青年男女は愛と悔改めの涙に咽びながら、虔しげに彼の足下に跪きました。預言者は地に下つた天の使の如く、靜に緑の河畔に立つて、耳新しい言を以て各人を祝福しました。其言には私達の心を刺すやうな神秘的喜びがこもつて居りました。

「神の羔の名により、我汝を祝福す」

遂に人々は一人去り二人去り、河畔の木蔭に天幕を張つた少數の者の他は、皆散つてしまひました。アリマタヤのヨセフと私とのみは、敬虔な好奇心を抱いて預言者の近くに立つて居りました。夕日は今しも遙なるエリコの塔の彼方に沈まんとし、ヨルダンとエルサレムとの間の山々は、濃い紫を以て彩色されました。ヨルダンは夕陽の強い反照を受けて緑玉の岸の間を滑つて行く黄金の帯のやうに見え、柘榴の木の枝を洩る光線を浴びて立つた預言者の姿は、往昔モーセが神の榮光を受けてシナイ山から下りて来た時の面を見るかと思はれました。彼は聖い黙想に沈んで居るらしくなりましたから、私達も話しかけるのを憚り、彼を凝視めたまへ、静に立つて居りました。やがて彼は笑顔で以て挨拶し、終日の働きに疲れた身をしかと杖にもたせながら、荒野の方を指して徐々に川岸を下り始めました。彼がまだ遠さからない中に、彼に追蹊しようといふ抑へ難い衝動が起りました。それで友人に向つて、

「彼について往つて、今日の話をもつとよく聽かうではないか」

と申しました。

ヨセフは初の間は彼と話すのを恐れましたが、遂に同意しました。而して瞑想に耽りながら荒野の道を往く彼の後を、静に追いて往きました。日は既に落ちて東の方には満月が上りました。預言者は屢々立止まつては天を仰いで、秋の美觀を眺めるやうでした。私達は漸々彼に接近しました。彼は間もなく私達を見付けましたが避けやうとしません。私は近寄つて小な聲で、

「尊い神の預言者よ、イスラエルの若い二人が貴殿と話す事を許して下さい。私達の心は貴殿に對する愛のために惱んで居りますから、」

といふとヨセフも亦、

「かゝる淋しい荒野に御一人では宜しくありませんから、私達も偕に居らして下さい」

So」

と附加へ、私は又、

「然し、主に伺ひたい事は、今日預言なされた近く來給ふ者の事でありませぬ、」

と申しますと、彼は明かに而して殿かに、

「友よ、私は特に撰ばれて荒野に住む者です。私が人々に接するのは唯自身の使命を果すためばかりで、地上の歡樂は敢て望みません。私の使命は唯一つ、極めて短い間の事です。私は預言者中の最も小さいもの、否預言者と呼ばれる、價値も無い者です。やがて此世に来るべきメシヤの光耀の前には、一片の塵にも値しないものです。もし何か私と話したいならば、来て此岩に御掛なさい。」

此の柔和な、殆ど悲げな調子を聞いて、彼を愛する念は益々高まり、彼の胸に身を凭せて泣きました。神の撰みを受けて地上の預言者となりながら、かくまで誠實謙遜である事は、私をして非常に感動せしめたのであります。私達が其足下に跪ぶかうとした時に、「私も人です、そうしてはいけない」と曰つて許しませんから、彼の兩側に腰掛けました。神秘めいた此時此所、かゝる聖者と語るには眞にふさはしくありました。満月は橙色の光波を豊に漲らせて、預言者の容貌に一層の清い柔和さを添へました。青藍色のヨルダン河は、足下の高い斷崖の間を急に走つて、通路の砂を噛む音がかす

かに聞え、蒼穹には無數の星が燦爛と煌き、左の方にはエリコの町が黒い拳ほどに見え、後の方に打續く廣漠たる無人の荒野は、物凄の中にも一種森嚴の氣を催させます。時しも彼方の川岸の荊球花の木蔭に張つた天幕から、夜の重い空氣を顛はして朗かな一人の歌聲が漂ふて來ました。夫は恰も冲天に懸る月への讚歌らしく聞こえました。預言者は

「萬物は皆神を讚美して居ります。我等は沈黙させよう」

と申しましたが、暫時過ぎてから、

「我等は神殿の夕の讚美を歌ひませう」

と曰つて、豊かな音調で歌ひ始めました。斯の如き神の全創造を頌める聖詩を、祭司達の口からは決して聞いた事はありません。私達も彼と聲を合せました。讚美の潮流は川を越えて彼方の岸に反響し、反響又反響、山も川も森も空も、共に調子を合はせて讚美するのかと思はれました。

ほめまつれ、主をほめまつれ

いと高きに在す主を、海にも在す主を、

イスラエルの民よ、主をほめまつれ、

彼こそは民を高きに置き、

永久にしろしめすなれ。

天使よ、萬軍よ、ほめまつれ、

日よ、月よ、星よ、彼をほめまつれ、

火よ、霞よ、嵐よ、雪よほめまつれ、

彼こそは義をもて世をさばさ

とこしへにしろしめすなれ。

ほめまつれ、主をほめまつれ、

鳥よ、獸よ、家畜よ、野の獸よ、

王よ、民よ、祭司よ、審判人等よ、

青年よ少女よ、幼兒よ、老人よ、

彼をほめまつれ。

彼等をして聖名を頌めまつらしめよ、

萬軍の主なる神の聖名を、

彼の聖名のみいと高く、

其榮光は諸々の天の上にあり、

イスラエルは其長子、愛したまふ者、

さればイスラエルよ、彼をほめよ、

とこしへにほめまつれ、とこしへに。

かうした時に歌ふた讚美歌は、永久に消えない印象を與へました。預言者は天の使

達の唱歌隊を指揮するやうにして歌ひました。此合唱は私の心に翼を生じ、地を離れて天翔るやうに感ぜられました。野に渡る風も、空の鳥も、咽を開いて共に合唱するかと思はれ、微妙き自然の樂と人の聲とが、一つに調和融合したやうでありました。私はこそ、こそは樂園の門である、何時までもかうして居たいと思ひました。

數分の沈黙を経てから、預言者は、

「イスラエルの兄弟達よ、私に尋ねたいといふ事は。」

「大預言者よ、貴殿の後に來るといふ其優れる者に就て委しく伺ひたいと思ひます」ヨセフがかう云ふと預言者は、

「今日説教した事の他、私の語り得るのは僅です、未來は封ぜられてあります。私は一つの音信を有つて居りますが、自由に開く事はできません。私は神から人への遞送者に過ぎません。今私に不明な點は、他日貴殿に示されるでせう。私が微見る事を得るに過ぎない神の人と、面接することのできる人は幸福です。或は悲みの場に於て私も彼と逢ふかもしれない。然し彼來れば私の使命は終りとなる。生きて彼

の榮光を見、彼の聖い唇から神の言を聞き得る者は幸福です。」

「聖なる彼は何時如何様な形を以て來ますか、」

と私が問ひますと、

「一人の人として、世の人々が望むやうな美はしき形でなく、卑しく低い柔和な人として、」

と申されますから私は、

「然し主よ、彼の力は限りなく、其王國は永久に續くと今日も御話なされたのでせう、彼の偉大なる王權と異邦の王達の屈服とを話されたでせう」

「夫は私に説明のできない祕密です。私はたゞ神から受けた事だけを話します。私のよく知つて居る事は、後に來る彼は私に優つた能力があつて、私は其履の紐を解くにも足らぬ事だけです。」

「貴殿は、彼は天より降れる主であると教へられ、又イザヤが、彼は人に侮られ捨てられ、我等の憐れのために傷つけられ、我等の不義のために碎かれると申した事を

も話されたでせう。」

「之等の語がメシヤに係る事は神の靈が私に教へましたけれども、其中に含める意味は私にもよく解りません。」

「夫ではかう解釋しては如何でせう、彼は聖い生命の主でありながら、罪人の中に算へられて死んだと。」

「さあ夫は如何ですか、メシヤ御自身で御示しになるでせう。彼の御教を聞き、御言葉を守る者は幸福です。」

「聖い預言者よ、此國の保護者が神から遣はされた時、悲い運命が貴殿に臨むといふのは如何なる理由ですか、イザヤも、エズラ、エレミヤと同じく救主は神殿の榮光を恢復すると告げました。彼は力の王、イスラエルの贖主、海より海、河より地の果までを支配する王者と呼ばれ、而して今偶像を拜んで居る凡の所を、エホバの禮拜所とすると曰はれて居るではありませんか。」

とヨセフが云ふと預言者はきつぱりと

「彼の國は此世の國ではありません、」

「それならば「我わが王を聖きシオンの山に立てたり」といふダビデの語やイザヤの「其政治と平和とは増加はりて窮りなし、且ダビデの位に座りて其國を治め、今より後とこしへに公平と正義とをもて之を立て之を保ち給はん」といふ預言などといかに解釋しませうか。」

「知りません、夫は神の祕密です。私は何事も申し上げられません。私はエホバの御言を傳へる喇叭にすぎません。私は自身の云ふ言の意味を知りません。神の國に生くるいと小さい者も私には優つて居ります。私は最後の預言者です、私の立場は、往昔の預言者達が幻影に見た偉大なる榮光の國の國の上です。彼等よりも其國に近づいて居るかも知れませんが、確實に申上ぐる事はできません。預言成就の階を來らすために、預言の最後の幕を上げやうとして來ましたが、其中に入りて祝福に與る事は許されません。私より遅れて來る者は却つて早く恵まれるでせう。然しなから聖旨には喜んで従ひます。彼の御用のために生まれた私は、いかなる使命に

も甘んじ寧ろ全地に明星の光が輝いて、希望の曉の近づいた事を祝ひませう。』
 かう曰つた彼の感情は非常に昂奮して居るやうでした。私達は彼の言に感激し、おのづと熱涙が溢れ落ちました。彼の前に跪つて、其手に接吻しました。彼は靜に私を抱き起し、やさしい言葉で、

「愛する兄弟よ、貴殿は私の話した彼に逢ひ、彼に愛せられ、彼の胸に凭れるでせう。」

之を聞いた私は咽び泣きながら、立つて少しく彼を離れ、其名譽ある祝福に與るにふさはしい者とならしめ給へと祈りました。ヨセフは心配さうに、

「私も亦強き神の子に逢はれませうか、」

と問ひますと、預言者は彼の手を取つて、其心中をも觀破るやうに其目を覗き、悲痛な調子で、

「貴殿は其腕に彼を抱き、自身のために備へた墓に彼を臥させるでせう。今云ふ言の意味は解らないでせうが、其日が來ますれば必ず憶起します。」

彼はかく曰ひ終つてから手を舉げて私達に挨拶し、荒野の方へと急ぎましたが、間もなく影が消えました。

暫時経つてからヨセフは私に向つて、

「彼の言を如何御聞きですか、何か恐ろしい出來事の預言らしく聞こえました。彼の面には恐ろしい表情がありました。どうも心配でならぬ。」

「然し、私は嬉しい。來るべき彼がもし彼の預言者のやうに優しいならば、全心全靈を盡して愛しませう。かゝる聖い御方と親みを有たるとは、何といふ不思議でせう。一日も早く其時の來るやうに、」

此時不意に側近くから、

「貴殿は受難者の來るのを歡びますか、」

と叫ばれたので、驚ろいて見ますと、程近い橄欖の木蔭に見知らぬ青年が立つて居ります。其人とは後間もなく非常に親しい友となつたのでありますが、彼の面は蒼白く、而も聰明に見えました。體はやゝ瘦せては居りますが、よく五體の平均が取れて

居ります。彼はイザヤの預言を憶出したと曰つて、語る所は悲痛に満ちて居りました。「彼は無限の聖善を有ち給ふ世の王であります。貴殿がもし彼の預言者に近づいて聞かれたならば、私と同じく來るべき者を歡ばれるでせうに。」

「私も近くに居りました。貴殿方が此處に掛けて居なされる間、私は彼方の木蔭に佇んで居りました。誤り給ふな、來るべき神の人は、悲哀の人で苦惱を知つて居られます。彼はイスラエルに拒まれ、ユダに侮られ、其姿態の賤いために彼が祝福せんとて來た人々には蔑まれ、涙と悲哀の生涯を終り、遂には罪人の中に算へられ、其生命をも奪らるゝでせう、貴殿はかゝる苦難の人の來るのを歡びますか？」

「私は驚きと尊敬とを以て、

「貴殿はどうして夫を御存知ですか？ 貴殿も亦預言者ですか。」

「否、兄弟よ、私は預言を讀んだのです。其上神から遣された聖い人に聞きました。而して彼は王者の威風よりも謙遜を取つて居ります。私の云ふ事を御信じなさい。メシヤの國は此世の國ではありません。私はイザヤの語を讀んで見ませう。」

彼は懷中から羊皮紙の巻物を取り出し、「我等が宣ぶる所を信ぜし者は誰ぞや」といふ語を以て始まる神祕的な難解な句を月光に照らして讀みました。讀終つてから彼は、

「之は幸福なる此世の王國の記録ではなく、謙遜と耻辱と輕侮との痛ましい記録であります。」

といふと、ヨセフは激昂した調子で、

「然し兄弟よ、この預言者に告げられた神の人は、辱しめられんが爲に生れたといはれたでせう、」

「彼は條を以て撃たれ、人々に拒まれ、獄に入れられ、遂には律法の上の罪人の如き死に處せられるとイザヤが申して居るではありませんか、」

「問題はイザヤがメシヤに就て曰つた事だけでせうと、激昂して論じ合ふて居る二人に注意しました。青年は率直な雄辯を以て、

「このヨルダンの預言者は、來るべきメシヤの先驅者として十分イザヤの語を説明

しました。今日私達にバプテスマを受けさせたのは、勝利の王のためではなく、悲みの救主を待望むがためです。謙つて他人の轡を自身に負ひ、而も遂には崇められ、萬民を引いて天國に入らしむる彼を見やうではありませんか、」

ヨセフは承知しません、

「然らばダビデの王位とは？」

「夫は神の右にあります、」

「さらばエルサレムは、支配さるべき國民は何處にありますか、」

「凡の物の上にある、天のエルサレムです、」

「では彼の永遠の王國は？」

「夫は永遠の生命のある所でせう、不滅の生命のない此地球上で、永遠に支配することはできません。アダムは墮落して樂園を失いました。さればメシヤや第二のアダムとして樂園を恢復しなければならぬのです。然し夫は最高き天の上、また天の使達が守つて居る神の王國に求められるのです。神の國が近づいたと預言者の申したのは

其事でせう。彼は私達の罪を其身に負ひ給ふから、私達は懲罰を免るゝ事ができます。彼が咎打るゝによりて私達は罪より赦さるゝのです。彼が世の罪を負ひ、凡の代贖となる事によりアダムの大家族が神と和がれるのです。之は私の救世主観です。」

之等の事を聞いて私達は感泣しました。聖なる神のメシヤが、罪人のためにかゝる悩みを負ひ、かゝる侮辱を受給ふと知つては、情激して號哭せざるを得ませんでした。彼が來給うたならば、彼の愛と慈悲と善のため、貴き自己犠牲をなし彼自身を私達に與へ給ふ彼のため、彼の前に平伏させよう。あゝ何處にか彼よりも尊い犠牲があらう。彼は預言に叶はせんがために自身を獻げ給ひます。さらば私達も聖旨に任せよう。オ、主よ、私はいかに居ります。聖旨のまゝになし給へ。」

青年が云終つて立去らうとした時に、私は思はずも彼の後を追うて、其胸を抱き、「オ、貴殿も眞理の預言者です。御言葉は古の預言の如く私の心の底に響きました。」

といふと、彼は天使のやうな誠實と町重とを以て、

「否、私は此事を聖書の研究によつて知つたのです。若も私の言に他人を益する所がありましたならば、夫は私の善き教師の賜です。」
と曰ひますから、

「私も學びたいと思ひます、其人の名は何と呼びますか？」

「彼は公衆の目を避けて居られます。少數の者としか話されませんから、彼の許しを得なければ御紹介はできません。然し御希望ならば願つて見ませう。」

「其人は何處に居られます。容貌は如何です？」
と深い興味を以て尋ねますと、

「彼は私達のベタニヤ村に来て、皆の者に賓客として深く愛されて居ります。平素はガリラヤのナザレで、年老いた寡婦の母を助けて、極めて質素な生活をして居りますが、孝子の模範だといふ評判です。人の心が荒れて父母に對する愛敬の念も薄らぎ、表面ばかりの孝行の多い時代に、彼はユダヤの青年に好模範を垂れて居るさ

うです。誰でも彼の如な賢い善い人に逢つた事はないでせう。」

「そうですか、是非御目にかゝりたい。其人の態度は高尚でせう。」

「人目に立つやうな美はしい所はありませんが、穩な威嚴が有つて、老人には尊敬され、小兒等には慕はれて居ります。彼は若い母が長子の寢顔を覗く時のやうな、温みのある眼を人に注いで親切に話します。彼の面は柔かい光を放つ太陽のやうであるが、其生涯の苦痛悲哀を預表する如な、一種哀愁の影が動いて居ります。彼が預言を説く時には神御自身の語り給ふやうな眞理を示されます。來るべきメシヤに就ては感慨に満たされて語るやうでした。而し其時にも情の激する所もなく、低聲で夫で明晰に、何人よりも聞かれない奥妙なものであります。」

「セフは一層の興味を以て、

「彼も預言者の一人ですか、」

「彼は預言もしません、説教もしません。」

「彼の名は何と曰ひますか、」

「ナザレのイエス。」

私達は此名を記憶する事を誓ひ、ベタニヤを経てエルサレムに歸る途中、彼に逢うて語らうと申しました所が、青年は穩に夫を拒んで、若もイエスが御承諾ならば、後でエルサレムに使者をやるから、ベタニヤに来るやうにと申しました。

もしも此青年と交際を結び、又彼を通してナザレの人と近付く事ができるならば、之に過ぐる幸福はないと思ひまして、彼の名を問ひました。

「私は書記ラザロです。」

マリアは從兄の話に、喙を容れ、

「ナニ？ 其人ならば私もよく知つて居ります。夫はベタニヤの友人マリア、マルタの兄弟です、昨年の逾越節の時、一週間彼の宅に泊りました。」

「そうですか、夫は又私達の友情を強く結ぶ帯となるでせう。」

とマリアに曰つて、再び物語を續けました。

「習日再會して交情を温め、三日目に各自歸途につきました。ベタニヤに着いて聞け

ば、イエスは母と共にガリラヤのカナに往つて不在でした。其處の親戚では近日中に娘の結婚式があるさうです。」

最愛の父上様、私はヨハネの長い物語を記して參りましたが、貴殿は此のヨルダンの預言者をマラキの申したエリヤとは思ひませんか。書記ラザロの話した人を、イスラエルの希望なる救主、平和の君とは御認めになりませんか。私の心の中には今戦ひがあり、疑惑があります。一方にはヨルダンのヨハネの弟子となり、バプテスマを受けて彼の後に來る者を迎へる準備をしやうとして居りますが、然し私達の家長達も預言者も、久しく待望んで居りながら、遂に見る事ができずに終つたメシヤの日を、私のやうな者が見る事ができるとは妄想らしくも思はれます。此特權の餘りに偉大に過ぐる事は、私をして疑ひを抱かします。父上様よ、何卒私を教へ、私のために貴殿の知識の庫を開いて下さい。貴殿は預言を御存知の筈です、荒野の預言者のメシヤに就て云ふ所は正しいでせうか。聰明なラザロの描いたメシヤの地上の生涯は眞實でせうか。父上様よ、彼は王でせうか、捕虜でせうか、何卒説明して下さい。生

命の主、死の苦難者、全世界の王で、人に侮らるゝ者とは如何なる意味でせう。預言者の噂は数千の人々により全国各地に流布せらるゝやうになり、ために一層深い興味を以て預言を研究する者が多くなりました。神よ、願はくば其民を顧み、祝福を垂れ給はん事を。

アデイナより

① 第六信

親愛なる父上様。

父上様を始め、アレキサンドリアにある皆様の御健康を伺ひまして誠に嬉しうございます。私は四ヶ月前、エジプトからエルサレムへ伴れて来て頂いたベン、イスラエルに逢ひました。彼は父上様の御手紙と結構な贈物を齎らしてくればかりでなく、父上様の御起居を詳しく知らしてくれました。彼は目下ダマスコに往つて居ります。彼地でシリヤ産の双物を仕入れ、埃及へ持歸つて賣る計畫のやうです。彼は隊商の往復

毎に多くの利益を得て居るさうですから、私は喜んで居ります。

アレキサンドリアに歸らぬかといふ彼の勧誘は、甚く私の心を動しましたが、私の修養のためを御配慮下さる父上様の御命令に従ひ、なほしばらく當地に滞留致しませう。

御手紙は洵に嬉しく拜見しました。心の中から小説的な事を追出し、謙遜に祖先の如くエホバを拜めとの御言葉でございますが、勿論いつまでもそう致しませう。彼の荒野の預言者の説く事の中に、先祖アブラハムの信仰に反対する傾向がありますならば、一時間たりとも受容れる事はできません。貴殿は仰せられました。「彼は偽の賤しき預言者である。是迄も多くの偽基督、偽預言者が出た。イスラエルの人々が荒野の預言者に就くやうに、彼等に従うた結果は、羅馬の官吏から謀反の企圖と認められ、或は荒野に放逐され、或は殺されてしまった。我娘よ確く祖先の信仰に立て、我は御身が野の悔改の説教者のために、非常な危険に陥りつゝある事を恐れて居る、メシヤの王國は勝利と榮光の國つであて、謙遜悔改の國ではない。ヨルダンの彼がメシヤ

に適用せんとする謙遜と屈辱の如きは、我等の期待するメシヤには適當しない。此の如きはキリストの先驅者たる小預言者に當るか（キリストが先驅者を有つ事は疑ひない）或はバリサイ人等の云ふ如く二人のメシヤが有つて、一人は異邦人の罪を贖はんがために來る謙遜と苦難のメシヤで、一人は王權と光榮とをもたらして我等に來り、エルサレムを世界の中心とし、地の諸王を其前に平伏させるものであるといふが、彼の云ふのは前者かも知れない。我等のメシヤは塵の中に伏して居るユダを高く擧げんがため、萬軍の主の遣り給ふものである。荒野の預言者の云ふのはたゞ異邦人のメシヤにすぎない。此の如きは力の王でもなければ、シオンの山なるダビデの王位に即くべきものでもない。御身はイスラエルの娘であるから、荒野の奇聞に注意する必要はない。又多くの國人のやうに狂愚を演じて彼に従ふ必要もない。忍んで待て、イスラエルの光榮の日は必ず來る。萬國の民が夫を見て喜ぶやうになるから。眞のメシヤの來る時には、毛衣を着、蝗と野蜜を食物として居る卑しい廿歳の青年と違つて、更に卓れた人物によつて預告される。アデイナよ、我は御身の伶俐なる判断を確信する。御身

も私と意見が遂に一致するであらう。憂ふべきは其預言者が凡の事を誤り傳へて、野心のために世を迷はせ、果は羅馬の劍のために滅ぼさるゝ事である。もし折あらば其後の事を委細書送れ」と。

父上様よ、かく仰せらるゝ父上様に對し、私は自分の心に湧いてくる思を如何申上げたらいいでせうか。されど父上様の御賢明なる、貴殿の前に現はるゝ眞理の面を避けやうとは決してなさるまいと信じますから、父上様の聰明と公平とを信任し、其預言者に關する出來事と、私の當地滞在在中に起る事とを忠實に御知せ申しませう。之は疑ひもなく異常な事實でありますから、何卒偏見を捨て、公平に御判断を願ひます。私は貴殿が「もう十分である、其預言者についてなほ多く必要は何處にあるか」と、眉を擡めて居なさるのを想像して居ります。然し父上様よ、私が前の手紙に書いたよりも、更に大事實があります。夫は神の祭司達が若い先見者の弟子となつた事であり、

ます。

マリアの從兄ヨハネの話の中に、預言者を見やうとして往つた祭司や他の人達が、

公然の説教で侮辱された事を御記憶でせう。彼等はエルサレムに還つて一伍一什を同僚に話しました。一同は非常に怒りました。多くのレビ人は神殿の勤行を忘れ、道路と神殿の門と市場と所を選ばず、新預言者のために無遠慮に攻撃された事を、學者、パササイ、其他の人々と話して居ります。夫は彼等に對して氣の毒な事ではあるが、彼等自身の墮落した生活の當然の報酬でせう。

遂にカヤバと共に祭司の長の務めをして居るアンナは、最も學問のある二人の祭司を荒野に遣はして、其預言者の言行を調査して報告させる事に致しました。彼は聰明な人でありますから、他の人々の如に徒に怒りません。ラビ、アモスが其事を私に話した時は、眞摯な熱心な心を其眼に現はして、ヨハネの話考へて居りました。使者は五日目に歸つて、祭司達の前で公然の報告を致しました。二人の者が祭司ザカリヤの子なるヨルダンの預言者から受けて來た事を述べた時には、祭司の長らも敬意を拂つて聴きました。

「往きて尊き祭司の長に告げよ、我は我等の日を預知る預言者イザヤの書に記され

た野に叫ぶ聲である。曰はく野に叫ぶ聲あり、主の道を備へ、其の道筋を直くせよと、我證しをする者は我より後に來ます、我は唯命に従つてメシヤの來るまで、聲を野に擧げるばかりである、凡の人は近く神の救を見るであらう。我使命は市場ではない、神殿でもない、又イスラエルの家にも入らない。我證しをする者は我より後に來る。我はメシヤの日の來るまで、我聲を擧げるのである。」

之を聞いて祭司達は大いに怒り、彼をエルサレムに引來り、石にて打殺すべしといふ者もあれば、謀反を起す危険人物として、大守ピラトに訴へよといふ者もありました。カヤバは後の意見を抱き、其法廷から羅馬の官吏に書面を送りました。夫れは彼の荒野の預言者は人民を煽動する危険人物である。もし皇帝カイザルが之を聞かれたならば、新しい主を擁して羅馬の勢力を驅逐せんとするユダヤ全國の陰謀と見らるゝであらう。軍隊を動かす必要の生じない中に、速に彼を捉へよと書いてあつた。温和なアンナは違つた意見を抱き、

「人々兄弟よ騒ぐなかれ。彼にしても偽の預言者であるならば、彼は程なく亡び

てしまふであらう。もし神から遣された預言者であるならば、彼を見誤まつた我等は萬軍の主と争ふ事になるであらう。」

七二

此穩和論の賛成者は、ラビ、アモスの他極めて少数でありました。が、外庭で預言者の答を聞いて居た祭司達は深く感動し、恰も預言者マラキヤ、ヘリの時にあつたやうな、抑制し難い昂奮状態になりました。使者の二人は手を舉げて一同の静肅を求め、夫から語りました。彼等は其預言者の言と使命を眞實として受容れ、罪を告白してヨルダンでバプテスマを受けたとの事です。そこがもし神の殿でなかつたならば、五百人の祭司達は二人を打殺したのでせう、遂は彼等は最高き神の祭司たる本分に背いたといふ理由で、カヤバの命令により逮捕されました。

而してカヤバは激昂して顔を擧げ、

「之は最高き神を無宿の詐偽師の足下に落し、シオンの禮拜者をヨルダンの荒野に行かしのむる公然の宣言である」と曰つて、更に一段聲を荒らげ、

「イスラエルの人々よ、神の壇とヨルダンの水と何れが偉大であるか、最高き者の祭司と荒野の彼と何れが優つて居るか、我等の聖い律法で審判くために、此の卑怯な謗瀆者を引け！」

と曰ひました。ヨハネの説教に感動して居た群衆は二人の祭司を奪去らうとしたが、カヤバが急に救を乞ふた羅馬の守備兵のために妨げられました。

新しい預言者の説教が社會の各階級の人々にいかなる感化を與へて居るかは、以上の出来事で略御解りでせう。

下級の人々は擧つて彼の擁護者でありますが、富者、官吏、祭司、其他社會の首腦たる地位を占めて居る人々は、或善良賢明な少数者の他は彼に反對して居ります。ラビ、アモスは神殿の勤行の他の凡の時を献げて聖書を研究し、而してメシヤの日が愈々近づいたこと、荒野のヨハネこそは來るべき者の前に道を備ふるため、エリヤの靈と力とを受けた神から遣された者であるといふ信念を益々確めて居ります。私の宅には毎夜十數人の有力なるユダヤ人が集つて、目下の問題に就て殆ど夜中すぎる迄議論

七三

を闘はして居られますが、彼等はヨハネにメシヤの先驅者たる地位を與ふべきか否かに就ても研究し、其中のステパノは、祭司の長の子供であつて、有名な法律家でありますが、彼はまだヨハネの説教を聞かないにも拘はらず、昨夜凡の預言を對照した上で、預言成就の日が近づいた事、又荒野のヨハネをメシヤの先驅者と呼ぶは正當である事を堅く主張しました。三分の二の人は之に同意ですが、他の人々は疑ひの中に議論を慎み、メシヤ自身の來給ふ日には、萬事解決すべしと申して居ります。

父上様よ、エルサレムの人心は此の如き状態になつて居ります。若榮光の王が俄に現はれたとしても之程の感動を世に與へる事ができませうか。

思ふに、荒野に唯一人住んで居る彼には、國民の精神を動かす或大いなる力があります。此力は神から來たものである事は疑はれません。父上様は、「ヨハネは奇跡を行ふか、奇跡を示せ、さらば信せん、之神の第一の約束である」と仰せられました。之は學者、祭司、パリサイ人などがヨハネの弟子に向つて放つ質問であります。彼は奇跡を行ひません。もし奇跡を行ふとせば唯一つ、連續したるものです。即ち彼は群衆を

荒野に引寄せ、ユダヤ全國から來て聽く者が日毎に増加し、彼から悔改めのバプテスマを受けるために、聖い水に頭を垂れる者が陸續として絶えない事のみであります。ラビ、アモスは來週神殿の勤行を休んで、彼の娘マリアと私とを伴れ、ギルガルに往かるゝ事になりました。私達はそれから二時間の路程しかない所に居る預言者を訪ふて其説教を聽く所存です。父上様、私の此度の旅行に就て御心配ですか。然し祖先の宗教が眞理であるならば、何も偽を恐るゝに及びません。眞理は祖先にあるか預言者にあるか、そは兎もあれ、私はイスラエルの眞の娘として何物も恐れませぬ。預言者が虚偽を教ふるならば眞理を守ります、もしも彼が眞理を説くならば、夫に従ふのは當然でせう。私も普通の問題については、適當な判斷をするだけの年齢と知識とに達して居りますから、直接預言者の言を聞いて、注意すべき預言か空しき妄想かを取捨する事を御許し下さい。

一つの事は確實です、即ちヨハネの預言するメシヤが最高き者の眞の子であるならば、彼は卑賤謙遜の形を取つて來て、祭司やユダの有權者や富豪より拒まれるといふ

事は確實です。神よ願はくば私達の心を開いて、眞のメシヤの來た時は公然に彼を拒み悔るが如き罪を犯さしめ給はぬやう。

私を無法な二人の兵士から助けてくれた羅馬の士官を御記憶でせう。彼は其後ラビ、アモスと親しい交際をなし、互に尊敬を以て話して居ります。彼は叔父さんの熱心なる研究の結果を聞くのを喜びますが、ヘブライ語を解し得ないと申しました。叔父さんは此眞摯な青年を有望なる改心者と認めましたから、通譯して聞かせるために私を呼ばれました。大理石の室に参りました時、士官と叔父さんとは其處の泉の側のアカシヤの木蔭に坐つて居られました。其木は數年前父上様がイザヤの墓から移植されたアモスから聞きましたから、私は夫に「父上様の木」と命名しました。

「アデイナ、此處に御出でなさい。此の羅馬の御方は御恩は忘れないでせう。」私は首を垂れて挨拶しましたが、不意に氣高い青年の面を見た爲に、眼を上げる事ができなくなりました。彼は何か申されたやうでありましたが、私の辛うじて聞き得たのは、微妙な音樂のやうに心を顫はす聲のみでありました。

「羅馬の士官よ、私の國の經典を知りたいと云ふ御望みですが、あの名高い神の託宣の書も預言から出たものです。」士官は謹ましげに、

「私はギリシヤ、エジプト、ペルシヤ、ゴール其他各國の經典をできるだけ研究致しましたが、彼の大ジユピタアの夫に比べれば、其教義と曰ひ儀式と曰ひ、殆ど價値のないのを発見しました。私達羅馬人は凡の物に神格を認めます。萬物を神と呼びます。今こゝにも神の在すのを認めます。」

といふとラビ、アモスは情愛のこもつた態度で、

「貴殿の御質問は此書の教ふる所に向つて居ります。こゝにエホバの唯一の啓示があります。こゝに神の性質の發展と宇宙の創造の過程とが記されてあります。こゝに神から出たと認むべき價値のある律法、教義、儀式があります。貴殿御自身で判斷して下さい。私は羅馬の國語に未熟ですが、こゝに埃及から來た少女が居りました。ギリシヤ又はローマの語に此卷物の記事を譯する事ができます。私は彼女の讀

ひのを聞きませう、アダイナ、此モーセの書の始めの方を読んで下さい。」
 私は始めの五百行程を読んで、夫をギリシヤ語に翻譯しました。高い教養のある彼は自國語と同じ程にギリシヤ語に通じて居りましたから、喜んで傾聴しました。御承知の如く其中には天地萬物と人間との創造の事、人類の墮落の事、失はれる所を恢復するメシヤの約束、カインの犯罪、罪惡の横行、大洪水の破壊等の事が記してあります。士官は深い注意と尊敬とを以て聴き、而して彼は私に感謝して、最高き主の指を以て記されたページを、なほ進んで教へよと申しましたが、もし萬物を改めるメシヤが來るとしたならば、彼はいかなる姿を取つて現れるかと尋ねました。此話から荒野のヨハネの説教や、近くメシヤが來るといふ彼の預言なども話題に上りました。ラビ、アモスは話に興が乗たと見え、ダニエル、イザヤ、ダビデ其他の預言を読んで聞かせました。夫等にはメシヤの力と榮光とがあると共に、侮られ捨てらるゝ事も記してありました。青年は暫時沈思して居りましたが、やがて力ある聲で、
 「人々の荒野に急ぐ理由が漸く解りました。私も彼の預言を聞きたいと思ひます、

と云ふと、叔父さんは、來週はギルガルに往き、而して預言者に聞くために荒野を訪ふ計畫をして居ると話した所が、彼は是非同道をと求め、
 「此頃噂によれば、有名な盜賊の首領のパラバが、其與黨を連れて、エフライムとエリコの間の山地に出沒し、途中は危険だといふ事です、預言者に聞きに往つた多くの者も掠奪に逢ふたさうですから、夫では私は騎兵隊を卒れて往きませう。」と申しました。
 父上様、委しい事はエリヤから申し上げます。盜賊の話によつて私はヨルダン行を躊躇しました所が、アモスは青年士官に護衛兵の事を感謝してから、
 「羅馬の騎士が御同行下されば何の心配もない、親切な特權を有難く受けて、計畫通りに行きませう」
 私達は來週早朝、ギルガル、エリコに向つて出發する事に致しました。他日詳細に御報告致しますから、私を信じて暫時御判断を御待ち下さい。私はダビデの國の來る事と、シオンの山に再び彼の聖位の置かるゝ事の、聖い希望を抱きながら、子たるの

愛を保つて居ります。

貴殿の愛する娘

アディナより

八〇

第七信

親愛なる父上様。

私の指は顛へてペンを正しく持つことができませぬ。私は只今面のあたり見聞した異常な現象を御知らせ申さうと思つて机に向ひましたが、ペンも紙も皆喜びに雀躍り致します。オ、父上様よ、メシアは來ました。私は彼を見聲を聞きました。彼はたしかに來ました。モーセや預言者達が記して置いた彼を、私は此肉眼で見ました。あゝ何といふ嬉しい事です。然したゞかう申した丈では御合點が行きますまいから、まだ彼を御覽にならない貴殿にも、私が見たと同じくわかるやうに、前の手紙を差上げてからの出來事を御通知致しませう。感情的でなくなるべく冷静な頭腦を以て有のままに申上げます。而してエジプトの地に於て最も賢明なる父上様の公平なる御判断

と御了解とを求めらる事に致しませう。前日東京から來て、カエロの隊商に托して上げた前の手紙で、アラビ、アモスが神殿の勤行を休んで、ヨシの近くに在る麥畑の視察に行くこと決心した事を申上げましたが、御存知の如く其畑は彼自身のものでなく、エリコを羅馬人の手から恢復しやうとして殺されたヨシヤミンの支族、マナセの相續人のものですが、彼は其保管を托されて居るので、アモスはヨルダンのヨハネの事に就ては何の疑惑も有ちませぬ。二人の間に二匹の馬、マリアと私とが切に願ひましたので、彼は私達を伴れて行く事を承諾しました。マリアの許嫁となつて居る彼の若いヨハネは、ガリラヤの湖で其父や弟のヤコブなどが管理して居る船を見るために先に行きました。ヨルダンの湖で私達と落ち合ひ、共にヨルダンに行く筈です。彼は毎日預言者の事のみを思ひ、一日でも逢はずに居られない程であります。

エルサレムからエリコに往く道中は、此頃バラバといふ者の率ゆる一揆が出没するため非常に危険になりました。バラバは昨年中羅馬に向つて反亂を企て敗北して

ドム湖の南に逃げたのでありますが、此頃預言者のためにエリコ街道の往來の頻繁になつたのを聞いて、一隊の悪僕と共に當地に参り、通行者の金品を掠奪するのです。ラビ、アモスは羅馬の青年士官から受けました。太守ピラトは、此賊徒のため道を塞がれ、羅馬の飛脚さへも殺された事がありましたから、部下に賊徒の掃蕩を命ぜられたのであります。ラビ、アモスは自分の土地へ往くに、羅馬兵の保護を受けねば不安である事を悲しまれましたが、然しアブラハムの裔には武器を取るの権利を有つ者は一人もありません、私達は主の置かれた腕の前に低頭れるのみであります。旅行の用意をしやうと床を離れた時はまだ薄暗い程でした。二人の僕は二頭の驢馬を庭に引出し、金の銜飾をしたペルシヤ製の靴布を以て立派に飾りました。此他荷物のためにも二頭の驢馬が準備されました。一は従姉マリアの旅行用具のため、一は私のためでありました。ラビ、アモスは、ダマスコの商人の貨物よりも嵩ばつて居ると曰つて笑はれました。太陽が昇つてから玄關に出て、跪いて神殿を仰ぎ、立脚る犠牲の煙と共に祈を献げました。羅馬の士官は見事なアラビヤ産の乗馬を提供しました

が、ラビ、アモスは老體で危険であるからと曰つて夫を斷り、強壯で溫和い驢馬を用意しました。

私達は柔い鞍や被布までも整ひ、警護の騎兵の來るのを待つて居ました時に、急いで來た使者がラビ、アモスの前に跪づいて、百人の長はアブラハムの柱の彼方の路で逢ふ事を告げましたから、皆驢馬に乗り、東の門を指して出發しました。一行はラビ、アモス、従姉マリアと私と、アモスの家の忠實な二人の僕とでありました。

其朝は實に愉快でした。太陽は神殿にも塔にも、城塞や壁や屋根や丘にも、谷にも川にも黄金色の光線を投掛けました。私達が羊門への道を指して往きました時に、祭司の長カヤバが、華麗な大理石の玄關に立つて居るのを見ました。曾て神殿で見た時のやうに、贅澤な寶石の胸牌や寶冠などを着けないで、長い黒衣の上に、白い麻の肩衣を纏ひ、雪白な髪の上には緋の頭巾を冠つて居りました。彼は普通の祭司の服裝をして居ましたから、もしも其高い體格や、長い白髪や、鋭い眼などに氣付なかつたらば、彼が私達を見下した時も、祭司の長とは思はなかつたでせう。ラビ、アモスは

彼に挨拶しましたが、私も地上に於ける神の代表者に向つて頭を垂れました。少し進んだ時、ケデロンの彼方の村から来た一隊の者に逢ひました。彼らが牽いて来た驢馬の背の荷物には、大きな籠に入れた斑鳩や小鳩などです。夫を神殿の犠牲用として賣るのでせう。私は無罪な動物が獄のやうな籠の目から、美しい藍色の頸を出し、さながら解放を求めらるやうに、眼を私達に注ぐのを見て、切に同情心をそゝられました。而して私は之等の罪なき動物が、イスラエルの男女の罪の爲に、其生命を獻ぐる事を思ひました時に、羞耻のために頬を染めました。私達は無罪の者を死なしめる程主の前に科があるのです。

私の後に乘り来たマリヤの驢馬が、大きな籠に觸れて驚いた時、一羽の鳩が籠の目から脱け出して空高く飛び上り、其翼に全身の力をこめて、見るまに城の石垣を超えて見えなくなりました。私は罪なき動物の逃げたのを見て心嬉しく、恙なく荒野の巢に歸るやうにと祈りました。

羊門に向つてエリコ街道の岐る所、貧しげな盲人が、小羊を引いて來るのに

逢ひました。彼は又小鳩をも携へて居りました。ラビのアモスの問に對して彼は其小羊と鳩を神殿の犠牲に獻げる事を話しました。

「バルテマイ、夫を獻げるのを止めなさい。」
 「然し先生、之は神への献物ですもの。」

叔父さんは親切に、
 「小羊は御身の道案内をする。日は御身の眼でせう。夫を失くしたら御身はどうして歩きますか？ 其手の鳩は、よく馴れて種々な齧をして子供達を喜ばせるから、日々幾何の金になるだらう、なくてならぬのを手放すな、サア金をやるから他の羊と鳩を買つて獻げなさい。」

「アモス先生、少し私の話を聞いて下さい。私の父は死ぬばかりの病氣となりましたから、此父の病を癒して下さるならば、鳩を獻げる事を誓ひました。其翌日には又母が大病になりました。私は生來の盲人でありましたが、夫でも至心の愛を傾けてくれた母が苦しんで居る所へ、同夜に小さい盲目の娘……父娘互に見る事もでき

ずは、しかし深く愛して来た娘が死にさうになりました時、此胸に抱いて居る小羊、私の子供に次いで愛して居たものですが、夫をも神に献ぐる事を誓ひました。然るに御恵によつて皆全快しましたから、私は喜んで献げるのです、身に有つ凡の物を献げて私の愛を表したいと思ひまして、

と曰つて、小羊の頸に繫いだ糸に引かれ、徐々に歩いて往きました。敬虔な盲人が小鳩を緊と胸に抱しめて、再三接吻するのを見て、私は涙を誘はれました。

此小さい出来事は、私に悲みを興へましたが、貧しい盲人の敬虔な心には厚い尊敬を拂ひました。彼の肉眼は人を見る事はできませんが、神を現前に見て居ります。其の厚い信仰は敬虔な祭司の胸には宿らないで、かゝる謙遜な人の中に見出だす事ができるかと思ひます。

羊門に着いた時も、他の人々のやうに引止められて通行券の検査もされず、通行税も徴集されませんでした。普通ならば徒歩の人でも、太守から特別の指圖がなければ通行税を徴られ、乗馬者は一定の増賃を収めねばならぬのですが、百人の首エミヌアカ（之は曾て申上げた青年士官の名です）が、私達のために門衛に通知してありましたから、容易に通過する事ができたのです。威めしい武装をして門前に立つて居た羅馬の士官は、恰も世界の勝利者に對するやうな町重な態度を以て私達に向ひました。地上の凡の市が、かゝる歩装兵の警備の下に置かるゝ事を思ひ、羅馬帝國の世界的勢力を恐ろしく感じました。

門の外には橄欖山から香氣を帯びた涼しい風が吹いて居ります。長い間市中の狭い道を歩いて居たのが、そこに出て恰も前に見た鳩が籠から放たれて、荒野の空を自在に飛翔るやうな愉快を感じました。

門を出て間もなく、ラビ、アモスは右の方にあるベテスダの池を指しました。私は其處に一種忘れる事のできない光景を見ました。その五つの廊には、病人、盲人、跛者、其他多くの不具者が群をなして、水の動くのを待つて居ります。アモスの言によれば、神は或時に天の使者を遣つて、池の水を動かしますが、其時真先に水に飛込んだ者はいかなる病でも癒されるさうです。私は驢馬の歩を暫時止めて、不幸なる人々

の群をよく見る事はできませんでしたが、凡そ四百人以上と思しき大衆が居りました。或ひは屈み、或は杖にもたれ、或は匍ひ、或は床に伏したるまゝ蒼い顔をした者や、人の肩に負はれた者、或は人を押退けて池に近づかんとする者など、形容し難い凄惨な状態を呈して居りました。突然驚くべき場合の變化が起りました。今迄鏡のやうであつた池の面は沸上るやうに動き出し、夫と共に周圍に群がつて居た四百の人々は、驚喜の叫びを上げて、先を争ふて池に近寄るのであります。最も近く居た者が狂はしげに池に入りますと、次の者も續いて突進し、前の者に妨げられて進めない者は恐しい言を以て咀ふのであります。又最も重い病氣の者は殊に驚くべき熱心を顯はし、遠く離れた所に居た者は殆ど超人間の努力をし、手足を以て四つ匍をなし、人の上を踏越さうとして後に引戻されながら、前に出やうと打跳きます。又比較的力のある者は自分の道を開くために、ナイフを振廻して兇暴なる振舞をして先を争ひましたが、門から之を見た羅馬の兵士は、劍を閃かして来て彼等を威しました。池の邊は物凄しい騒動となりました。餘りに悲惨な光景で見るに忍びませんから、驢馬を急

がして去りましたが、後に聞けば彼の騒ぎの収まつた時には、數人は殺され、又五人は水の中で他者に踏まれて溺れたさうです。

ケデロンの境に着いた時、私はアモスに向つて、
 「天の使がかゝる混亂を起したり、人間の最悪性を動かしたりするといふのは眞實でせうか」

と曰ふと彼は、
 「水の動くのはたしかに奇跡です。天の使者の働きは善いのです、彼は癒しの力を興へます。然るに彼の慈悲があつたやうな思はしい結果で報いらるゝとはどうしたもの

でせう。」
 私は沈黙しながらも、神の恩賜をさへも呪咀とする人の罪を悲みしました。
 私達は夫から稍右に向ひ、羅馬人によりて架けられた堅固な橋を渡り、谷に沿うて
 アブラハムの柱の見ゆる所まで参りましたが、私の前には誤まつて父に背いた彼の若い王子が現はれたやうに感ぜられました。樞の老樹を指さしたアモスは、之は彼が

森を駆抜けやうとした時に、不幸の運命を齎らしたものであると語りました。其近くには十人の壯者がアブラハムを殺して投入し、其上に石を積んだといふ穴の痕を示しました。エルサレムの附近には興味ある史蹟が多くあります。

二つの道の相會ふ所に來た時、勇ましい馬蹄の音と共に、若い士官に引率された騎兵隊が現はれました。甲冑の音喇叭の響は、私達の心を跳らせました。エミリアスは王者の如き風采を有ち、彼の磨いた鎧の日光に照映ふた状は火の鎧のやうでありました。彼の側には隊の標章の鷲を携へた若い兵士が居りましたけれども、百人の長自身は、階級を現はす金の鎖のついた蔓の鞭を持つた丈でありました。彼は叮嚀に挨拶し、それから、其兵を前衛と後衛とに分けて出發しました。百人の長はラビ、アモスや、私達の近くに乗つて居りましたが、私達のために隊長としての職務を忘れるやうな事は致しません。最深の注意を拂つて隊を指揮して進みましたが、殊にベタニヤの彼方の荒野に差懸つた時には、一層注意深く見えました。さらば父上様、エルサレムを離れてからの詳しい事は、次の手紙で申上げませう。さら

は先祖アブラハムの神、貴殿の守護者となり楯となり給はん事を。

貴殿の愛する アデインナより

第八信

愛する父上様。

只今荒野にユダヤの全國民と預言者に關して、私の申上げた事を喜んで御受け下され、又私の迷をも御解き下さいまして、洵に有難うございました。御親切に勵まされて、現在経験して居る凡の出來事を遠慮なく申上げられるのは、此上なき喜びであります。私は唯自身の受け印象を御通知するばかりでなく、之等の事實を見聞して博學聰明な人々の告白をも御報告致さうと思ひます。かう致したならば、父上様も此人物が果していかなる種類に屬するかを御了解なさる事ができると思ひます。先日の手紙は、百人の首に引率された羅馬の騎兵の一隊が來た事で筆を止めて置きました。其時はまだ朝早く、太陽はなほアラビヤの丘の上にかゝつて居り、軽い弾力

のある空気が呼吸するのも快く、殊更に祖先の聖地を祝福するかと思はれました。アラビヤ人が沙漠を横切る時のやうな愉快を感じながら、最早ベタニヤの近くに参りました時に、三十人程の賊徒の一團が大膽にも近づいて来ました。彼等は暫時此方を見て居りましたが、強い保護者の従いて居るのを見て、飛ぶが如く山の茂みに隠れ去りました。

程なくベタニヤの丘の頂上に着きました。其高所からは、聖都エルサレムの中央に、朝日の金色に染められて輝く神殿を見る事ができました。其華麗な眺めに相對したの、黒いアントニアの塔で、武威を誇るダビデの城砦が、石垣の上に睨んで居る所も私に深い感じを起させました。私は手綱を控へて、エルサレムを眺める間、暫く待つてくれるやうにラビ、アモスに願ひましたけれども、彼は離れて居て聞えなかつた爲めか私の願を容れてくれません。私の側に居た百人の長は、部下に命じて隊の行進を止めてくれました。私は彼の親切を謝して、夫から城に向つて腫を凝らししました。私は記憶を辿つて往昔に歸りました。先祖アブラハムがメルキセデリに獻

物とする所から、周囲の國民を征服せんがため、門から出て来る軍隊の先頭のダビデを見ました。南北諸國の王達、富んだシバの女王などが花やかな行列を造つて聰明偉大なソロモンの宮殿を訪ふ所も見えました。然るに今や全地はイスラエルの耻辱と屈服の歴史を以て充たされて居ります。されど其日が来たならば、彼女は其顔を塵から擧げて王の衣を着け、神は其頭に冠を被らせ、榮光と權威とは限りなくなるであらう。私は又記憶の幻影を眺めました。アッシリア、カルデヤ、エジプト、ペルシヤ、サウラス、ギリシヤ等の軍勢は各方面から襲うて来て、神の聖火の燃ゆる祭壇をさへも毀ちました。あゝされど父土様よ、之は皆預言者の申したやうに、祖先が餘り遠く神から離れた爲ではないでせうか、今日の私達は史上の教訓を學ばねばなりません。驚いて私を見て居た羅馬の士官は、「貴女は羅馬を見たいと思ひませんか。此都の六倍も廣く、非常に立派な町です。其中にはエルサレムのものを凌ぐやうな神殿が三百六十五もあります。」

「然し神は唯一のしかありません。」

と私が申しますと、彼は丁寧に、

「私達は小な神々の群を造つた、一つの大きな神のある事を信じます。」

と申すのです。私は氣品が高くて、而して眞理に愚かな人を氣の毒に思ひ、萬物を造り給うた神の一つである事を預言を引いて説きました。然し彼は手近の枝から一輪の花を摘取つて、

「この如き花や、結晶の形や、紅玉などを造り、或は之等の香ばしい花の間を飛廻る小鳥などを造る神は、大デユビターよりも下に位して居るでせう？彼は日月星辰などを造りましたけれども、其他の小さい業は、下の神々に任せただけです。貴女の一つの神の話をして下さい。而して夫が凡の物を造つた事を證明して下さい。もしも其が確實ならば、貴女の神は私の神かも知れません。」

といふのです。今の場合上から示された眞理を取つて、彼に宗教上の議論を挑むにも及ぶまいと思ひましたから差控へました。

私達は又ベタニヤ街道を乗つて行き、間もなくラビ、アベルの家につきました。

彼は數年前商用のためアレキサンドリヤに来て死なれたのであります。父上様の仰せに従ひ、彼一家の安否を問ひました。ラビ、アモスに驢馬から助け下して貰ふや否や、廣い質素な家の前には、氣持のよい空氣の流れて居るのを感じ、家人に逢はない中から、我家の玄関を登る時のやうな悠揚した氣分になりました。

私達の着いたのを聞きつけて、廿一二歳位の美しい娘が出て来て、莞爾して迎へてくれました。ラビ、アモスが私を紹介した時には、彼女は愛の手をさし伸べて私を抱きました。姉妹の胸に凭れたやうな心安さと、彼女に對する無限の愛とが湧いて来ました。

次には卅歳位の、伶俐で善良な人柄の青年が出て来ました。彼は體は少し瘦せて見えました。私に向つて歓迎の手を伸べた時見交した眼には、叡智に満ちた情愛の光が閃いて居りました。父上様、貴殿は私の前の手紙で既に彼の性格は御承知の筈です。彼は實に今天に居る父上様の友人、アベルの息子ラザロであります。戸口で迎へてくれたのは其姉のマルタです。彼女は、アレキサンドリヤの富豪の娘を、かゝる貧しい

家に迎へるのは恥づかしいと、色々訛言を申しましたが、私は遠慮を打消すために彼女を抱きました。夫からマルタは急いで食物の準備にか入り、程なく質素ではあるがよく口に合ふ御馳走を運んで来ました。食事中、マリアとラザロは私の側に坐つて、アレキサンドリヤの話、殊に其父の墓に就ての話を追りました。

マリアは眞に美しい娘であります。其眼はユダヤの空のやうに碧く、ヘブライ少女に通有な星のやうな涼しさを帯び、柔かい金褐色の髪は白い頸にかゝるやうに結ばれて居ります。聊かの修飾を加へない其風采が何とも云ひ難い程可憐で高雅に見ゆるのは、其内部精神が夏の空のやうに純潔を保つて居るからでせう。

マルタは實に活潑で、快活で、丈高く、さながら女王のやうな態度で一家を支配して居ります。腫と髪とは漆黒で、眼の聴く輝く所は弟のラザロと酷似です。其聲には又一種の魅力が有つて、友情は強い信認を起させます。私達への響應は凡て彼女の指揮によつたやうでありました。沈静なマリアは彼女に關りないやうに坐つて、祖先が永く奴隷とせられた埃及の物語をそゝり、かゝる所に住むのは恐ろしくないか、バ

ロの墓を見たか、ナイルに近い七十の金字塔は、私達の先祖の勞作によるのではないかなどと尋ねました。

ラザロは、ラビ、アモスと荒野の預言者の話に興を催して居るやうでした。食事の終つた時、マリアは、明年神殿の幕に用ふるためにつくつた美しい縫箔の布を見せました。マリア姉妹は神殿の裁縫をして暮して居るのです。ラザロは祭司の用ふる律法と詩篇とを筆記して居りました。彼は其筆記に用ふる机と羊皮紙の巻物をも見せました。夫には見事な筆跡で餘程記してありました。彼は又立派に書いたイザヤの書を見せてくれましたが、夫のためには百七十日を費したさうです。

机の上に、絹と天鵞絨とを以て造つた表紙に、橄欖の葉を縫取り、其葉の間に「ナイ」と二文字を現はした巻物包は之も祭司のためかと問ふた所が、彼は莞爾に微笑みながら、

「否、夫は私達とラザロの友人で又兄弟の方に上げるのです。」

「夫は何誰ですか？」

「ナザレのイエスと云ふ、」

従姉のマリアは夫を聞いて、

「私はヨハネから其人の事を聞きました。私達も彼を知る事ができたら、どんなに幸福でせう。」

「皆さんが五六日早く来たなれば、御逢ひになれるのでした。彼は三週間ほど我家に居られました。ついで此頃ナザレに歸ると云つて立たれました。然し明後日何か大切な用事のため、ベタバラでラザロと逢ふさうです、我家のラザロは湖を渡つて往くのも厭はない程彼を愛して居ります。」

之を聞いたアモスはラザロに向つて、

「もしや貴殿が御友達と逢ふために、近くヨルダンに御出でならば、御同行なさつては如何です？ 私達には護衛兵も居りますから」と曰ひますと、ラザロは其姉妹と相談してすぐ承諾しました。

何といふ幸福な家庭でせう。三人純潔な愛を以て結ばれて居ります。而して今や此

團欒の中に第四の者が加へられました。彼等は互の勞働によつて日々のパンを得る貧しい生活をして居りますが、金銀珠玉を以ても代ふる事のできない王者も羨む生活をして居ります。

私も尊敬を以てこの愛情の家を辭しましたが、若も此の友情の鎖の第五の環に加へられたならば、どんなにか幸福であらうと思ひました。百人の長も此の家庭の美しさに感動し、途中で其事を話して居りました。

正午頃に、ベタニヤとエリコの中程にある宿屋につきました。私達は此處で、學者法律家として名高いガマリエルといふ、叔父さんの御友達の一団に追つきました。ガマリエルの道伴はサウロといふ青年で、私は豫て此青年が名高い法律學者の弟子となつて、其の濫輿を究めて居る秀才だと聞いて居りましたから、特別の注意を拂つて見て居りました。サウロはラザロと連立つて、長い事熱心に話して居りました。新しい預言者の説教は何等の眞理を含まない誤謬だとサウロが云へば、ラザロは頻に辯護して居りました。サウロは預言にも博く通じ、眞のメシヤは荒野で悔改めの説教

をして居る者のいふやうな者でない事を、預言を引照して説明するのを、百人の長は近く寄つて傾聴して居りました。

其日の夕方エリコの塔と石垣の見ゆる所に來ました。町に着いた時には、門は既に鎖されてありましたが、百人の長は命じて再び開かせ、閉門後外に迷ふて居た人々をも私達の組に加へて、城内に入らしめました。

昨夜彼の有名なバラバの一團がヨルダンの近くに現はれ、隊商を撃つて多くの人を殺し、多くの分取物を獲たといふ通知がありましたので、百人の長は彼等を追跡するため隊を率ゐて出發しましたが、ギルガルの道路は安全でありましたから、私達のみで出發しました。

私は今ラビ、アモスの田舎の家で此の手紙を書いて居ります。明日は早朝出發してヨハネが今洗禮を施して居るヨルダンの彼岸のペダバラといふ小邑に參ります。ラザロはサウロと多くの學者、博士、法律家達を引連れガマリエルの團體と共に、荒野の預言者の説教を聞きに往きました。

預言者の出現は極めて稀有の事でありますから、洗禮者ヨハネは神の眞の預言者であるかも知れぬといふので、イスラエルの人々は各階級を通じて好奇、希望、驚異を以て、未曾有の興奮を現はして居ります。「卿は新預言者を見たか？」彼はメシヤではないか？」と問ふのが、相逢ふ人々の第一の言葉であります。

ペタバラで見た所は次の便で委細申上げます。是迄の事よりも一層深い興味を父上様に起させるかも知れません。

イスラエルの希望である救主の近く來給うた時、謙遜と尊敬と愛とを以て迎へる事は、私の切なる祈禱であります。

貴殿の愛する娘 アデイナ

第九信

親愛なる父上様

毎度些細の事迄書加へ、甚だ冗漫しくなりますが、之は父上様が私と共に在して此記

憶すべき出来事を面のあたり見聞なされたと同じやうに、事實の上に正しい判断を御願
したい微衷から出るものでありますから、何卒御赦し下さい。

ギルガルの小麥畑に囲まれたラビ、アモスの家に着いた時、彼は收穫のために二週
間滞在の計畫を立て、僕達に仕事の指圖をして、夫から従姉マリアと私とを伴れ、ヨ
ルダンの預言者に往く準備をしました。長い道中を乗疲れた私達が、又しても驢馬に
跨つて往ねばならぬかと思つた時には、多少嫌な感を起しました。然るに此度は佩囊
を負うた僕を伴れて歩く事になりましたから、道々楽しく語り合つて行くのが實に愉快
でありました。ラビ、アモスは祭司の身分を有ち、且風采も立派でありましたから、
地方の人々から尊ばれて居りまして、往逢ふ人は皆町重な挨拶を致します。

「マタイさん、大層急いで何方へ？今日は税金の取扱を休んで、矢張荒野の預言者
へですか、」

からラビ、アモスに呼懸けられたのは、髪も髯も真黒な、而して丈夫さうな聰明げな
人ではあります。幅廣い其衣は古びて醜くありました。彼は笑ひながら答へて、

「近頃は各人ヨルダンに往つて、宅に居るのは留守番位ですから、税金を納めに來
る者などは殆どありません。此新しい預言者は私達の町を空にししました。税吏も皆
と共に往くか、晝寝でもする他はありません。」

「事實ですマタイさん、」

叔父さんはかう曰つて更に、

「然しあなたは態々エリコから來なさつたについては、羅馬の貨幣を見るより他に、
何か動機がありますか、」

「私は近いガリラヤ、デカポリスは勿論、エルサレム、ユダヤ、ヨルダンの彼岸か
らまでの群衆を引寄せて居る人物を見たい好奇心からであります。」

「貴殿も彼を眞の預言者と思ひますか？」

とアモスが問ふと、マタイの答へぬ先に其伴の一人は、

「彼は詐偽師ですよ、奇跡を以て使命を證明しない預言者はありませんから、」
と、不興げに鋭い言で申しました。マリアも私も初めから此男の面を見るのが不快で

した。丈が低く、人相が悪く、身装も卑しく、怪しい風でアモスに諂ふ所など、偽善者に相違ないと思はれました。彼は齒を剝出して笑ひますが、其眼には險惡な相が見えました。表面だけ謙遜を装うて内に傲慢を抱いて居るとしか思はれません。自分の利益のためならば如何なる悪手段でも用ひ、人の前に頭を垂れて却つて其人を亡ぼすのは此る人物でせう。彼の聲の響は、彼に對する最初の印象を深くしました。話をする時にラビ、アモスが凝視すると、心中を看破れるのを恐れるやうに畏縮しました。彼が少し離れた時、マタイに向つて、

「御伴の御名前は？」

「イスカリオテのユダと曰ひます。彼は私の村々から集めた金を預つて居ります。

ベタバラ、ギルガル方面で税金を集めた時から、一緒になつたのですが、」

話して居る中にヨルダンを見得る所迄來ました。偶々北の方から、見知らぬ乗馬の人が参りまして、預言者は以前の地點より二哩ほど上流の、ベタバラの邑でバブテスマをして居る、現に一萬に近い人が群がつて居ると語つて去りました。

ラビ、アモスはマタイに向つて、

「彼の人を御存知ですか、」

「どうしてさう御考へですか、」

「先程御挨拶をなさいましたから、」

「彼はヘロデ家の役人で、ヘブライ人中での富豪です、皇帝に納める地税はエリコ、エルサレムを通じて彼の右に出づる者はありません。」

二時間ほど急いでヨルダンの緑の岸を行きますと、ベタバラの所在を示す青い林の上から、四角な石の塔が現はれました。其塔の下の洞穴は、エリヤが長く住居をし、其左に見ゆる丘の上から火の車に乗つて天に昇つたといふ傳説です。其近くに見ゆる一つの岩は、エリシヤが天に昇つた預言者の外套を以てヨルダンの流を分けた時に現はれたさうです。

天の車に乗つたエリヤが、漸々見えなくなる所を想像しながら、丘の上を凝視しました。前は木々の茂みが稍別れて居りまして、其處からは心臓の鼓動を高めるやうな異

常な光景が見えました。河流の彎曲る所に近く廣い窪地があつて、附近一帯は全く人を以て埋められて居ります。此大群衆は悉く彼等と反對の側に立つ預言者を見詰めて居ります。無数の群衆は半圓形を描いて彼を圍み、彼に近い岸の上には主に若い弟子達が坐つて居ります。澄切つた若い預言者の言は遠く離れても聞えます。人々は息を殺して一言一句をも洩さぬやうにと聽いて居ります。私の甚く驚いたのは、マリヤの從兄ヨハネを預言者に近い弟子達の群に見出した事であります。預言者の説教題は例の如くメシヤでありました。彼の雄辯に就て十分御知らせ申すことのできないのは、私の大なる遺憾であります。

「若も汝等、牝牛、小羊の血が我等の罪を洗ふかと問ふならば、私は答へます、主はこれらの血の河を喜ばれませんと、」

彼が熱心に語り續けますと、近くに居た利未人は、

「如何して？ モーセの律法によりて定められた犠牲が……如何して？ 祭壇に献げられた犠牲の血が……」

と、息をはづませて詰寄せました。其時預言者の眼には靈火が燃ゆるやうに見えました。

「如何して？ 夫は神が世の創始から定め給ふた眞の犠牲の型にすぎない、虚影にすぎない、汝等自身の力で群の小羊を献げ得ると思ふか、否、イスラエルの人々よ、汝等の眼の開ける日が來ます、日々の犠牲の奥義を悟る日が近づいて居る、見よ、メシヤは來ます、汝等は彼を見彼を信するであらう。」

多數の洗禮を希望む者が彼に近づいて來ました。彼が其男女の人々に洗禮を施して居る時に、彼方の塔に近い小山の上から、マルタ、マリヤの兄弟のラザロが、同じ年頃の青年を伴つて現はれました。夫は形容もできない程、威嚴と、溫柔と、慈愛と平和の相を備へた青年です。私は一見して魅せられてしまひました。

彼は身に黒藍の衣を着け、ナザレ人のやうに長い髪を垂れ、帽子を冠らずに居りました。他の人々と異つて、溫い中にも侵し難い威嚴を備へた彼を、私は目を放さずに凝視しました。

彼を見つけた瞬間、預言者の面は天の使を見た時のやうに變りました。其眼には天上の光りが閃めき、唇は何事かを語らうと開いたが、語るべき力を失いました。而して新しく群衆の中に加はつた青年の方に右手を伸ばして、銅像のやうに突立ちました。やがて彼は、ホルプの喇叭のやうな聲で叫びました。

「見よ！」

群衆は指さるゝが儘に小山の方を見ました。預言者は更に、

「汝等は何故に日々小羊を屠るか、見よ、罪なき犠牲の小羊を殺す事を廢むべき日は來ました。」

と叫んで、兩手を威嚴ある青年の方に舉げ、

「見よ、世の科を負ふ彼を。我より後に來る者と、我證しゝものは彼である。彼は最高き神の子メシヤである。神のキリスト、我等凡の罪を負ふ小羊は立つて居る。彼は汝等の道を進み、汝等の道を歩み、汝等の家庭に在つたが、救主の徴候を見るまで我は知らなかつた。」

預言者が人々の胸を刺す言を以て呼ばはつた時、青年は彼に近づいて來ました。ラザロはうつ向いて立つて居ります。預言者に近寄る青年のために、群衆は退いて道を開きながら、隠かにして熱誠のこもつた蒼白い其面を覗きました。彼の近づくのを見てマリアの従兄ヨハネは地に跪いて拜みました。彼の道の前に群つて居た人々は曰合はしたやうに譲つて、水際まで一筋の道ができました。彼は自然に備はる王者のやうな威嚴を謙遜の中に包んで、足音も立てず徐に歩きました。預言者は群衆よりも一層深い尊敬を拂つて、自分に近づく青年を見守つて居りましたが、益々進んで水の中に立た彼に接して來ましたから、

「オ、神の預言者メシヤよ、貴殿は僕に何をなさしめんとし給ひます？」

「卿のバプテスマを受けませう。」

朗かな穩かな聲でかう答へました。あゝ其聲、私は永遠忘れずまい。

「僕は、貴殿のバプテスマを受くべきものであります、然るに貴殿は僕に求められますか、」

預言者が敬虔、謙遜、驚異の心を以て問ひますと、彼は柔和な調子で、

「凡の正しい事は、我等皆盡ねばなりません。」

と答へました。預言者は疑ひと畏れとを有ちながらも、他の人々と同じく、メシヤにもバプテスマを授けました。

父上様よ、今私達の前には、往者シナイ山で律法を興へられて以來の一大事が起りました。彼が水から上るや否や、一點の雲もない空から雷鳴のやうに轟く音が聞えました。驚いて打仰げば天は火よりも輝いて、其中央からキリストの首の上に、一道の光線が矢のやうに飛んで來ました。人々は驚いて雷鳴の音だと曰ひ、電光の閃きだと申しました。更にキリストの頭の上には榮光が輝き、恰も翼を張つた火の鳩の如き物を見た時、人々は戦慄しました。天からは雷のやうな聲で、

「之は我愛子、我喜ぶものである。」

と言ふのが聞えました。誰一人天を仰ぎ見る者はありません。皆顔色を失ひ、互に顧みて驚き怖るゝばかりでありましたが、やがて轟止み鳩が消えて光景一變し、たゞ神

の子の頭に、暈のやうな後光が残りました。人々は漸く己に歸つて、彼こそはキリストトである。もう一目見やうと思つた時には、彼は人々の尊敬を受け得る所には居りませんでした。

貴殿の愛する アデイナより

第十信

親愛なる父上様。

之迄差上げたる私の手紙をば公平なる御心を以て御覽下され、尙次々に起つた事を知らせよとの御求めにより此手紙を認めます。何卒私の申上げる事を何處までも公平に御讀み下さい。ヨハネの説教、イエスの受洗と萬餘の人々の前に彼がメシヤたるを宣言せられた事、「こは我が愛子なり」といふ天からの聲が一般の人に聞こえた事、之等は皆言消す事のできない事實であります。貴殿も亦「彼はキリストではないか」と嚴かに御尋ねになりましたが、私は敢て御答へ申します「さうです、彼はキリストで

す、私は信じます」と。

之を御讀みなさるやさしい父上様の御面が、俄に曇るのを私は想像されます。然しながら父上様よ、私は父上様の面目を傷けるやうな事は、決して致しませんから御安心下さい。貴殿がユダヤ人であり、主と偕に歩んだ家長達の裔である事を誇となさるならば、私も亦此國民と信仰とを誇ります。ナザレのイエスを神のメシヤと信ずる事は、ユダヤ人たるの體面を汚す事ではなく、寧ろ此信仰がなければユダヤ人たるの事實を完ふする事はできません。メシヤはユダヤ人の祈禱として、イスラエルの希望として多年期待されたのであります。メシヤが来たといふ事は私達ユダヤ民族の一大特質を現すのではありませんか。異邦人はキリストを求めますか、冗漫しい事を私から申上げるよりも、當地に御出で下さつて、親しく御覽なされるならば、神がイスラエルを御記憶遊ばさるゝ事を御確認の上、御互に喜び合ふ事ができると思ひます。

貴殿がこの異常の現象をいかに御考へなさるかを知りたいために、次の御手紙を深い懸念の中に待つて居ります。此事については私の手紙のみを御待なさる必要はあり

ません。イエスの評判はエジプトへも傳はつて居ると思ひます。殊に雲もない空から雷鳴のやうに神の聲の聞えた事、新しい預言者の頭に火の鳩が留まつたことなどは、地の果までも聞えて居るでせう。ダマスコやカイロの商人は、群衆を少しく離れて、駱駝の上から見て居りました。アラビヤの騎者は乗つたまゝ人々に交つて聞いて居りました。ローマの軍人、ベルシヤ、エドムの旅人、メデヤの商人さへも共に此の出来事を實見したのであります。此事は唯一部分に行はれたものではありません。私は其聲を聞き、一語々々を明かに理解しました。夫は遠い所から起つたやうでありましたが、喇叭か雷鳴のやうに嚴かに響きました。イエスが川から上られた時、彼の頭の上に下つた火は、燐の塊のやうに見えました。鳩のやうに翼を開いて留まつた時、彼の全身は日の如く輝きました。其光は一分間ほどで消えましたが、なほ柔かい後光は彼の頭の周圍に残り、彼の面は、シナイ山を下りて来たモーセのやうに榮光に輝きました。人々が彼の威嚴と榮光とに打たれて頭低れて居る間に、彼は其姿をかくしました。其消え去るのを認めたのは、ただマリアの従兄ヨハネと、マリア、マルタの兄弟ラザ

の二人のみでありました。

驚きと畏れとからさめた群衆は、もう一度彼を見やうとしました。其影もありませぬ。人々は川の中、荒野、天と彼の所在を求めんと眺めました。私も亦彼は火の車に乗つて其父の在す國に歸つたのではあるまいかと思つて、天を仰いだのであります。或人は預言者が餘りに早く取去られたのを悲み、或人は神がイスラエルを忘れないで祝福を賜ふたのを喜び、又或人は自身の悪い心から事實を正しく視る事ができないで、彼は魔術である、音は雷鳴、火は電光であると申しました。然し多數の人々は其見聞した事實を喜んで信じました。

ヨルダンの預言者ヨハネは、何人よりも之を驚いたやうに見えました。彼はイエスを見出さうと頻りに四邊を眺めました。居りませんので、さては天へ昇つたと思ふたのか手を組んで拜むやうに空を仰いだまゝ、一人身動きもしないで居ります。イエスが突然姿を隠した爲に、群衆は四散しましたが、ラビ、アモスと私達の團體は、預言者と話を交はさうと留まつて居りました。其時は彼の弟子すらも残つて居りませんでした。

ラビ アモスは彼に近づいて、

「聖き預言者よ、先刻バプテスマを受けた方は何誰ですか、」

今迄凝然と天を仰いで居た預言者は、涙ぐんだ眼をラビ、アモスに向け、感動した調子で、

「私の後に來る者と、前に證したのは彼の事です。私は彼を知りませんでした。私が、聖靈が私に囁いて、汝は靈が鳩の如く彼の上に留まるのを見、彼は靈を以てバプテスマを受けるであらうと申しました。私は靈が鳩の如く下つて彼の上に留まるのを見ました。彼こそは私に示された神の子であるとわかりました。」

アモスは深い興味を以て、

「預言者よ、さらば彼は何處に去りましたか、」

「私は知りません。彼は益々盛になり、私は衰へねばなりません。彼は天に昇つたか地に留まつて居るかわかりません。唯私の證した者が來ましたから、私の使命は終りに近づきました。」

と曰つて、ベタバラに向つて河岸を下り、間もなく堤の木の間に影が消えました。ラビ、アモスを見るとマリヤは其腕に凭れて泣いて居ります。私は勇しげなアモスの面を見て「今日見聞きした事は、皆眞實と思ひますか、」と問掛けますと、

「今日の事については、神はイスラエルを忘れたまはぬ證據を見たといふ他、何も申されません、」
と曰つたまふ、堅く口を噤みました。

私達は河岸を下り、ギルカルの叔父さんの宅に向ひました。途中多くの人を通過しましたが、彼等は皆今日河で起つた事を、高らかに話して居りました。イエスがバプテスマを受けてから天に昇つたと思はれた事は、凡の人に深い感動を與へたやうに見えました。

父上様よ、此不思議な人物が、まだ地上に生きて居る事を御知らせ申す事のできるのは、私の大なる喜びであります。私は、最初に河岸を下りて遂に木蔭に没するま

で目を留めて居たらザロとヨハネの話しを聞きました。二人は屢々其影を失つたけれども、なほ沙路に印つた彼の足跡を辿つて、二つの丘の間から、荒野の方に向つて姿をかくさうとした時に、遂に発見したさうです。二人は急ぎ走つて、エリコと荒野の方に廣がる乾いた沙原を横切るのを認め、息急ぎ走つて漸く近づき、

「善き師よ、暫時御止まり下さい。私達も御供して學びたいと思ひますから、」
と曰ふと、彼は立止まつて二人を見ました。其面は悲愁と苦悶とで蒼ざめて居りました。二人も亦變り果てた主の姿を見て驚きました。榮光の輝きは全く去つて、悲痛のあらはな表情に心の中を思ひやられました。長く彼の胸にあつた友ラザロは聲高く泣きました。

「友よ、泣くに及ばない。他日再び逢ひませう。私は聖靈の導に従つて、之から荒野に行きます。彼處に私の行く事は、卿等のためにもなりません、」

「夫ならば私達も偕に参りませう、若も貴殿が悪魔の試練を受けなされるならば、私達も一緒に受けませう。」

「いや、夫はいけない。私は唯一人で試練の盃を受けねばならぬのですから、彼は二人を説きなだめて歸してしまひました。二人は其言に従ひましたが、言の意味はわかりません。何か不思議な試練が彼を待つて居るやうに思はれるが、何の必要あつて荒野に行かるゝのでせう。殊に一度天の榮光に輝いた彼の姿が、今や見る影もなく變りはてたのは意外でならなかつた。彼が驀然に進んで行く淋しい荒野の方に向つて、其後影の全く見えなくなるまで見守つて居りました。」

二人の友達は、其夜ギルガルのラビ、アモスの宅に來ました。一同は其夜遅くまで無花果樹の下の廊下に集まつてイエスの事を話しました。

さて父上様よ、是等の事は皆不思議ではありませんか、大預言者が、私達の中に居るといふ事は拒まれせん。私達を荒野にまでも導いたバプテスマのヨハネの星！其星は神の子の榮光の前に土螢の如くに衰へました。あゝ萬事は驚異くべき秘密であります。神よ、私達の祖先の神よ、天より臨りて其國民を救ひ給へ。

敬虔なる娘 アデイナ

第十一信

最愛の父上様！

前の手紙で申上げたやうに私達はヨルダンからギルに歸り、ラビ、アモスが收穫のため二週間滞在する、ベニエルの麥畑の中の田舎家に居ります。マリアの従兄ヨハネ、氣品高きラザロ、ガマリエルに其弟子のサウロなどを加へて、談話會が開かれました。庭前には親切な祭司が、遠路ヨルダンに來て、宿や食物を有たない人々を招き入れましたから、客人が充満でした。

イエスの面は何人のよりも痛ましげに見えたとヨハネが話したので、人々の深い興味を喚起し、學者ガマリエルが、

「之は預言者イザヤが、メシヤに就て曰つた所に該當て居る。」

といふと、ラビ、アモスは

「ではイザヤを少し調べて見せう。マリアよ、此處へ預言の卷物を持つて御出な

マリヤは歸つて来て、皆の前の小卓に其巻物を置きました。

「尊きラビよ、聲高く讀んで下さい。私は今日バプテマスを受けた青年は、萬事をダビデの家に恢復すべきメシヤとは認めませんが、尊敬すべき預言者として承容りたいと思ひます。」

哲學者ガマリエルが斯う申しますと、アモスは、

「では預言者がメシヤに就て曰つた所と、彼の上にあつた事實とが一致しても信ぜられませんか、」

「夫ならば勿論信じもします、尊敬もします、」

と、殆んど膝にまで垂れて居る白鬚をゆるがしながら聖人は答へました。叔父さんが、

「アデイナ、御身は眼が若いから夫を讀んで下さい」と申されましたから、

私はかうした人達の前で少し恐れましたが、次のやうに讀

みました。

「見よ、我僕知慧をもて行はん、上りのぼりて甚だ高くならん、曩には多くの人彼を見て驚きたり、(其面は傷はれて人と異なり、其形容は衰へて人の子と異なれり)」「是等の言は荒野の彼方に於て見た彼其儘です。之でもなほ彼をメシヤとして認められませんか?」

とヨハネが曰ふと、ガマリエルの弟子サウロは、

「然し之がキリストの預言であるとしたならば、彼が敬ひ尊ばれずに、卑しい形を取つたといふ事も明かにしなければなりません。少女よ、御身の残した所を讀んで下さい」

私はまた次の如く讀みました。

「後には彼多くの國民に注がん、王達彼によりて口を噤まん……彼は其手を異邦人の上に擧げ、其旗を民の上に立てん……王達は其面を地につけて、汝の足の塵を嘗めん」

「そこです、夫が私達のメシヤです、」

とサウロが叫びました。ガマリエルも亦、

「さうです、夫が力と權威とを以て、イスラエルを贖ふキリストです。今漸く卅歳にも達しない青年で、何處から來て何處へ去つたかわからぬやうな者は、此預言には當りません。」

と申すのでせう。學徳の優れた人がかう曰はれるのを聞いて、私は全く失望しました。ラザロの話す所によれば、イエスは貧しい木匠の子で、其母は寡婦であることと小さい時から知つて居る、然したゞ彼を愛する事のみを知つて居るとのことでした。然し學者ガマリエルが何と曰つても、少しも信仰の光を曇らせず、イエスこそ疑ひなきメシヤであると確信して居る彼を見て、私も勇氣を取返しました。而して彼の面を時々覗き込みながら、次の言を讀んだ時には、私の信念は愈々確くなりました。「われらが見るべき美しき容なく、うつくしき容貌はなく、われらが慕ふべき艶色なし、」

此時ラザロは輝く眼をサウロに向け、

「もしも此預言の最初の部分が、貴殿の曰はるゝ如くキリストに關するならば、終りの方を如何しませう。預言の成就といふ事には、凡を含まねばならぬかと思ひます、」

かうして一方はガマリエル、サウロと、一方はラビ、アモス、ヨハネ、ラザロと別れて、激烈な論戦が交へられました。やがて主なる議論が終つてから、ヨハネは言柔かに、

「夫は兎に角、ガマリエルさん、サウロさん、あのバプタスマを特別なものとした、あの不思議な聲を何と解釋なさいますか、」

「夫は自然の現象でせう、さもなくば群衆の中に居たバビロニアの魔術師の業でせう、」

と哲學者は答へました。

「貴殿は其言葉を開かれませんか、」

と、ラビ、アモスが尋ねますと、

「聞きました。彼等は種々に怪異な業をやるから、魔術の瓶から空中に投出したのでせう、」

「貴殿は魔法使が聖い主の御言葉を用いたと御考へなされるのですか」
とヨハネが熱心に問ひますと、彼は度しげに、

「否、決してさやうな事は………」

「もしラビ、アモス、御承知ならば、メシヤに對する王ダビデの言を讀んで見ませう、」

と、ヨハネが上衣の衣囊から詩篇の巻物を取ら出した時、凡の人は興ありげにヨハネに注意しました。

「いかなれば、地の諸々の王は立構へ、群伯はともに謀り、エホバと其受膏者に逆ふや……われ詔命を宣べん、エホバ我に宣たまへり、汝は我子なり、我今日汝を生めり」

かう讀むのを熱心に聽いて居たガマリエルは、

「夫は特別の事です。エルサレムに歸つて後、此問題をよく調べて見ませう、」

といふと、サウロは又熱心を以て、

「然し私の讀むのを少し聞いて下さい。『ベテレヘム、エフラタ、汝はユダの郡中に小さきものなり、然れどもイスラエルの王たる者、汝の中より我ために出づべし、その出づる事は昔より永遠の日よりなり』」

と讀んで勝誇つたやうな見得をなし、

「どうです、之等の言が有つても、貴殿方は私のメシヤ觀を拒みますか、」

叔父さんが、

「疑ひもなく、然し………」

と曰ひ出さうとすると、

「一寸待つて下さい、他の所も少し讀んで見ますから、」

「我ダビデと契約を立て、汝の裔を永遠に保たん、汝の位のすべての民のために設

けん、彼の裔は限りなく、彼の位は火の如く我前に輝かん、主曰ひ給へり、見よ、我がダビデの正しき枝を起さん日は來れり」と結んで、夫から、

「さあ如何です、貴殿方はメシヤに關するこれらの言を容れますか、彼はダビデの裔で、ベテレヘムで生まれなければならぬ筈です。彼のイエスはナザレ人ですか、若も彼自身がこの凡ての條件に合ふならば私は彼を信じます。」
 是には誰も答へ得まいといふ様な、誇りげな態度で申しました。するとラザロは直に、

「キリストはベテレヘムから生まれるといふ預言を、私は忘れて居りましたが、イエスが夫に適當ことを發見して、實に愉快でなりません」

といふのを聞いて、私も亦非常に喜んで居りますと、ガマリエルは言鋭く、

「否、イエスはナザレで生れたと私は聞いて居りましたが、
 といふと、ラザロは、

「幼い時からナザレに住んで居りました。カイザル、アウグストが戸籍調の勅命を全世界に出した時、彼の父母は戸籍につくためにダビデの邑ベテレヘムに往つて、其處でイエスが生まれたことは、屢々彼の母から聞きました。」

「彼はベテレヘムで生まれたとしても、ダビデの裔たる證據にはなりません、」
 とサウロがいふと、ラザロは、

「彼の父母がダビデの裔でなければ、何のためにベテレヘムに往きませう、自分の家族以外の所に往つて戸籍の登録を受ける者はありません、彼がダビデの家に往つたといふ事實は何よりも有力な證據でせう、」

「ダビデの邑で生まれた者は幾多もある。其處で生まれたといふ事は、必ずしも重大の問題ではない。然し此イエスがベテレヘムで生れたといふのは驚くべき事である、」

と、ガマリエルが口を挟みました。其時私は叔父さんに向つて、

「確にダビデの裔か否かを調べるための系圖書が、律法によつて保存してありませ

んか、」

「勿論夫れは神殿に藏めてあります」

ガマリエルも續いて、

「メシヤが来た時、夫が果してダビデの裔から出たか否かを調べるため、神の律法により、最深の注意の下に、神殿に保存してあります。私はエルサレムに歸つてから調査して見ませう、」

といふと、ヨハネは感情興奮して、

「夫でもし、確にさうである事を發見なすつたら、貴殿はイエスをキリストと御信じになりませうか、彼がベテレヘムで生まれたことも、ダビデの系圖であることを疑ひないとし、而して今日神自身の口から告げられた事もあります、それでも貴殿はイエスをキリストと信ずる御決心はありませんか。」

「夫等の事實は、彼を拒まないやうに私を導きますが、而しダビデの邑、ベテレヘムで生まれた嬰兒は多くあります。此二つだけではまだ預言の完成には不十分です。」

と冷静な哲學者は答へました。

「然らば此他に何の條件を求められますか、」

「奇跡！」

ガマリエルの弟子は、其師の顔を見上げながら、かう直截にいふと、其師も、

「さうです、奇跡です。メシヤは其言葉を以て盲目の眼を開き、死ねる者を甦へさ

ねばなりません、」

「もしも彼が其やうな奇跡を行ひますならば、私も直に彼を信じます。」

サウロも亦かう申しました。

其時庭前に居たバプテスマのヨハネの弟子の間に、争論が生じて喧しくなつて來ました。ガマリエルは其室に歸つて休みに就きましたが、主人のアモスは外庭の群に話して、議論は夫で終りました。

父上様よ、當日目撃した人々の間ですら、此のやうな異つた意見をもつてイエスを見て居りますから、私も貴殿から、言語文字を綜合して正しい判断をして下さるやうに

とは望みません。たゞ聖書の言によつて、メシヤはまだ來ないといふ反證を擧げて頂きたうございます。

昨夜庭に宿つた人々は、翌朝早く出發しました。私達も亦朝食をすましてから、エリコに向つて乗出しました。ラザロは用事があると曰つてベタニヤに歸りましたが、彼の友ヨハネは私達の一行に残りました。ヨハネとラザロとは、神の預言者を必ず見付け出す事を約束しました。二人とも敬愛する兄弟を見失ふたのを非常に悲んで居ります。

アデイナより

第十二信

親愛なる父上様。

私は是迄色々面倒な問題や、多分御不快を備さるゝかと思はるゝ事どもを申上げました。大なる忍耐と親切とを以て御返事を賜り、感謝の辭もございませぬ。此度も

亦續いて同じ問題について認める事を御許し下さい。

ギルガルから歸つて、既に八週間を過ぎました。其間エリサフの子のヨハネが來訪する迄の五週間は、イエスに就て何の消息も聞きませんでした。彼とラザロとが市に來て、ラビ、アモスを訪ふた時に、私達は先づ、

「その後彼の方に逢ひましたか、何か聞きませんか」

といふと、ラザロは、

「ヨハネは彼に逢つたさうです。尋ねてごらん下さい、種々な事を知つて居らるゝでせう。」

ヨハネは心配ごとでもあるかのやうに、柔和しく悲さうに坐つて居りましたが、従姉マリアは同情と心配とを以て、始終彼を注意して居りましたが、手を其肩にかけてやみしく、

「貴殿、何處か御體でも悪くはありませんか、長い間見えなかつたが御病氣ではなかつて？」

「い、え、マリアさん、少も其様な事はありません。私は其後全く健康でした。私も彼に向つて尋ねました。」

「貴殿は何を見られて？」

「荒野のイエスを、夫を思ふと私は笑はれません。」

「其後彼に御逢なまつて？」

と、私が熱心に尋ねますと、

「さうです。心配して何日か搜索した後、是迄何人も往つたことのない、灰の荒野の中央で彼を発見たのです。彼の跪づいて祈つて居る聲が聞えました。』
私は夫を委しく知りたいたいと思つて、

「如何して貴殿は其處で彼を発見られたの？」

「沙と灰とに印つた彼の足跡を追いました。彼が坐つて休んだ所もありました。彼は途中二夜地上に休まりました。私はもしや彼の死體を見出すのではあるまいかと、恐れながら往きました。然しまだ其恐が事實とならないで、毎日足跡を見付

けて追跡しました。さうして遂に祈つて居る彼を発見したのでです。恐るゝ近寄つて、携へて往つたパン包と魚と水囊とを其前に置きました。私が彼に近づいた時に、聖靈が彼に囁くのを聞きました。夫から彼は甚く苦悶して地に倒れました。彼は見えなない強敵と論戦して居らるゝやうに思はれました。」

「善き師よ、私はパンと水を持って來ました。若御邪魔になつたら許して下さい。」

私は貴殿の苦みを思ひ、自分の胸を痛めて泣いて居ります。不思議な苦難に堪ふる力を得るため、何卒食べて下さい。」

と申しますと、彼は瘦衰へた姿を私に向け、力なげに笑つて夫から私を祝福し、さて申さるゝには、

「我子よ、御身は深く私を愛して下さい。他日私のために苦まねばならない。然し夫は今日の事ではない、其日には今私がこゝで苦んで居る理由を悟るでせう。」

「聖きメシヤよ、私を御側に置いて下さい。」

「御身は、私が彼である事を信ぜられますか。」

彼は愛の眼を以て私を見ながらかう申されました。私は自分を荒野の焼けた沙の中に投出し、涙に咽びながら答へました。彼は私を抱き起して、

「さあ御歸りなさい。私の断食と試験の日が終つた上で又逢ひますから、」

「さ、え、私は貴殿から離れません、」

と、彼の言を遮りました。彼は一層面を和けて、

「愛する者よ、私を愛するならば私の言に従ひなさい、」

「では此水とパンとを取つて下さる、」

と願ひました。

「御身は私の前に置かれた試験を御存知ないから、願ふ所も知らない。御歸りなさい。私が聖靈に導かれて、今戦うて居る此世の王、サタンに勝つ日まで、私から離れなさい。」

私は再び彼の足下に身を投出しましたが、彼はまた抱起し、接吻して去らせました。皆さんは彼を知りません、長い間の断食で瘦衰へ、苦みのために悴れて、恰も影

のやうでした。もしも彼を支へる天の力がなかつたならば、生きて居られぬ筈です。

私が見付ける迄の五週間は、少しの食物をも取られないのです、夫こそ神が彼の中に居る何よりの證據です、夫だけで一つの奇跡です。」

かうヨハネの話すのを聞いて居たラビ、アモスは非常に興奮して、

「神が彼をして、人々の中に大なる御業をなさしめやうとするための準備でなくて

何でせう。確に彼は神から遣された預言者です、」

と申しました。私は一種の不安を以て、

「貴殿は彼がなほ生きて居られると思ひますか」

と口の中で呟ました。

「私は、彼が天の助けによつて凡に打勝ち、四十日の後、突然荒野を出で、ヨルダに於てヨハネの弟子達に現はれた事を御知らせに來たのです。私が洗禮者の側に立つて、キリストが荒野に退隱なされた事と、其勝利の話を聽いて居りました時、預言者は眼を上げ、喜びの聲で叫びました。」

「神の靈が彼の上に來ました。神の羔を見なさい。彼は七度爐の火に精められた黄金のやうになつて來ました。彼は世の罪を負ふ者であります。」

預言者の指す方を見ると、其處へイエスが現れました。面は蒼白くなつて居ります。更に苦痛を嘆く様子もなく、一層の柔和と慈愛と謙遜と高雅とが加はりました。私は餘りの嬉さに、彼に近づいて其膝下に平伏しました。彼はさながら兄弟のやうに私を抱て、

「全き信仰と愛とを以て私に従ひますか？」

「主よ、私はどこまでも離れません、」

夫からヨハネの弟子アンデレを呼んで、

「友よ來て見なさい。」

私達は曰難い喜びを以て彼に従ひました。彼は豫て宿と定めてあつたベタバラの或寡婦の家に入られました。私達も彼の周旋で其處に泊る事となりました。彼の言の美しさ、夫は到底申上げられせん。彼の言は新しい酒のやうに、魂の底にまで滲み

透りました。翌日、彼は其母の居るガリラヤのナザレンに往く事を望まれました。もはや私達も彼の弟子でありましたから、共に往く事を決心しました。夫で私の計畫をマリアに話し、事務の整理をもして往かうと思つて、一寸戻つて來たのです。ガリラヤのカナで、愛する師と逢つもりです。」

是等の事を聞いてから、ラビ、アモスはヨハネに向つて問ひました。

「貴殿は彼の全計畫を知つて居りますか、多くの預言者のやうに知慧の學校を起すとか、ダビデのやうに世を治めるとか、或は大將ヨシユアのやうに征服するとか、」

「私は、彼が來て失はれた者を贖ひ、神の國を建てる目的である事を聞いた他、何も知りません。」

之を聞いて、私達は彼に對する信念を厚くし、嬉しさのあまり聲を合せて讚美しました。

新しき歌を主に向ひて歌へ、

そは妙なる事を行ひ、其右の手、清き腕もて、

己のために救をなし給へり。

主は其救をしらしめ、其義を

諸々の國人の目の前にあらはし給へり、

又其憐憫と眞實とを、

イスラエルの家に向ひて記念したまふ、

地のはても、悉く我神の救を見たり。

此朝太守ピラトから、祭司の長カヤバの許へ、ユダヤのメシヤが自ら王と宣言して居るならば、此の如き者を逮捕するのは私の職務であるが、彼は果してかく宣言して居るか否かとの、正式の質問が来たために、祭司達の間に容易ならぬ騒ぎが起りました。彼等は騒がしい會議の中で、ナザレのイエスをメシヤと認めないといふ返事を與ふる決議をしました。ピラトは如何する意志か私にはわかりません。其朝アモス

が使者から受けた消息によれば、イエスは彼をメシヤと呼ぶ多くの人々に後を追はれて、カナへの途中にあるさうです。

父上様。此聖い人物は既に人々の心を捉へ、又敵の反對をも喚起しました。彼が其旗を異邦人の上に擧げ、凡の人々を彼に引寄せる日の来るやう。

貴殿の愛する アデイナより

第十三信

親愛なる父上様。

先日の御手紙は、カイロの商人、アラキアルの子のヘビルから受取り、御言葉に従うて、ラビ、アモスにも読んで御聞かせ申しました所、彼は貴殿の仰せられる、力ある支配者、地上の王の王としてのメシヤの、輝く榮光の御意見には賛成できないとの事です。彼は私から貴殿に申上げるやうにと言傳なさいました。

前の手紙を差上げてから、父上様の申越されたことが實證された爲に、私の信仰

は愈々堅固になりました。貴殿は「若も彼の使命の神性を証明するために、是迄の預言者のしたやうに、盲人の目を開くとか、死人を甦へらすとか……夫ができるならば私も信じませう」との御言葉でございました。

彼は何人も異議を挟む餘地のない程の奇跡をなさいました。數日前、イエスに逢つて其弟子となるためナザレに向つて出發したヨハネが、マリアに書いた手紙の中から、特別にすぐれた一事を御知らせ申しませう。

「私はナザレに着いてから、イエスの母に案内されて、或賤しい家に参りますと、その周囲には人々が山のやうに群がつて居ります。夫は皆新しい預言者を見るために集まつたのです。私は群衆がイエスをいかに思つて居るかを試さうと、

「何、新しい預言者？」

と反問しますと、或一人は、

「荒野のヨハネの預言した者です、」

と曰ひ、他の一人は、

「人は皆彼をメシヤだと申して居ります、」

と曰ひ、他の一人は一層強く主張して、

「彼はキリストです、」

其處に居た或利未人が、侮辱するやうな口調で、

「キリストはガリラヤから来るものですか、少しでも預言を研究すれば、其位の事はすぐ解る筈だ、」

と曰ひますから、私が、

「さうです、兄弟よ、キリストはベテレヘムから來ます。而してイエスは今此地に居られますが、生まれられたのはベテレヘムですよ、」

と言ふと、レビ人は少し怒つて、

「貴殿は夫を證明されますか、」

群衆の中に居た老人と白髪の老婆とは夫を聞いて、

「御客さん、眞實の事を御話なさい。私達は此土地の者ですが、彼の両親はイエス

がまだ幼児の時、ベテレヘムから移つて來ました。彼等は、幼児は彼處で生まれたと語つて居りました。私達はよく夫を知つて居ります。」

と曰はれたので、利未人は群衆の意見が自分と違ふのを見て、早くも何處かに立去りました。夫から私は、イエスと其母の住んで居る家の戸口に近づきました。入口は二つあつて、其作業場に通ふ方を覗いた所が、腰掛だの道具だの、彼と母との生活のために造つた物で一ぱいになつて居りました。けれども居間に這入つて、イエスが澄んだ聲で、慈愛に溢れた面で、天の智慧に充ちた教訓を傳へて居るのを聞いた時には、工匠も忘れ、家も忘れ、たと神の子、王子、メシヤを見るばかりでした。

私を見るや、彼は莞爾として手を伸べて招き入れ、其身邊に居た五人の弟子達に紹介して下さいました。

『之は私に従ふために、此世から來た貴殿の兄弟です』

其中の一人は、私のよく知つて居たヨハネの弟子のアンデレ、他の一人はアンデレの兄弟のシモンで、イエスは其人の確實熱心な性格を見抜かれて、ペテロ即ち『磐』と

名命けられました。其中のピリポもバプテスマのヨハネに導かれてイエスに従ひました。彼はメシヤたるイエスを見出した喜びの餘り、親戚ナタナエルが、庭の無花果樹の下で祈つて居る所に走つて往つて、

『私達は、モーセが律法の書に載せ、又預言者達の記した神のメシヤに逢ひました、』

『私も逢ひたいが、彼は何處に居りますか？』

『夫はヨセフの子、ナザレのイエスです、』

ナタナエルは夫を聞いて失望したらしく、

『ナザレから何の善者が出ませうか、』

『とも角來て御覽なさい、』

と誘はれて、ピリポと共にイエスの許に參りますと、イエスはナタナエルを見て周圍の人に、

『見よ、其心に詭譎のない、眞のイスラエル人が來ますから、』

と申されました。ナタナエルはかくと聞いて非常に驚き、

「貴殿はどうして私を御存知ですか？」

「ピリポが御身を呼ぶ前に、御身が無花果樹の下に居るのを見ました。」

ナタナエルの祈つて居た時には誰も来ませんでした。兄弟の来たのさへも知らなかつたのに、夫を知給ふイエスが、萬事を見給ふと思つて、

「師よ、貴殿は神の子です、イスラエルの王です」

と告白するのを、イエスは喜ばしげに聞いて居られましたが、

「御身が無花果樹の下に居るのを見たといふので信じますか、御身はもつと大なる事を見るでせう。誠に御身は、天開けて神の使達が、人の子の上に昇り下りするのを見るでせう。」

と申されました。

アンデレ、ペテロ、ピリポ、ナタナエルの四人はイエスと偕に家の中に居りました。私の驚き且つ喜んだのは、私の兄弟ヤコブも亦彼等の中に居た事でありませう。イエスは彼が小船の中に居るのを召した所が、ヤコブは凡を捨て、従うたさうです。かう

して私達六人の弟子は、信認と愛の鎖をもて彼と結びつけられました。イエスの母マリアは真に美しい聖い婦人でありませうが、愛と柔和の眼を以て其子を見守り、彼の言を天から来た知恵として學ぶために、熱心に聽いて居るやうです。

其翌日、私は兄弟のヤコブと共に、商業の利得を父ゼベダイに渡すつもりで、テベリヤの湖に往つて居りました時に、其日の午後、イエスはカナへ往く途中其處を通られました。私は船と父とを置いて彼に従ひました。

彼の母と親戚の人々は、親戚の従妹の結婚式に往きました。私達もカナに着いて、客人として迎へられました。其宅の主人は羅馬政府の役人でありましたが、特別の尊敬を以てイエスを迎へました。私達はそこで又、イエスの母の親戚である、バプテスマのヨハネの母エリザベツにも逢ひました。イエスが祝筵の司と話して居るのを見て、預言者の母は、

「オ、マリアさん、貴女は何といふ幸福でせう、御子さんと共に此席に列なる事ができました。私は母ですが、然し今は母ではありません。神が私に與へられた子

供は、預言者として取られました。彼は死んだと同じです。此の六ヶ年前に現はれて、神の子の誕生を宣言するまでの廿年といふものは、生死の程さへ不明でした。」と語つて居りました。

結婚式は始まりましたが、此頃カイザリヤ附近で一揆の騒動があつた爲に、其日までにダマスコの葡萄酒を届ける筈の商人はまだ來ませんから、酒の準備は僅しかありません。式を司どつて居る町の上役は夫と知りませんから、多く酒を式場に運べと僕達に命じました。イエスの母は酒の乏しい事も、祝宴の半に酒の盡さるのは、花嫁のために不幸な事も知つて居りましたから非常に心配して、イエスに向ひ

「彼等にはもう葡萄酒がありません。」

といふと、彼は人々が最大の尊敬を拂つて居る其母に、

「婦よ、御身のために私は何をなすべきでせう、私の時はまだ來ません。」

其言の深い意味を悟つた母は、他人の難儀を救ひ得るといふ確信と喜びとで、サツと頬を紅らめました。さうして僕達を呼んで、

「イエスが皆さんに命ふ事は、何なりとして下さい。」

と頼みました。イエスの面には沈着と威厳とがありました。其中には能力のあるのを確信するやうな、強い決心の様子も見えました。其附近に數箇の石甕が空になつて居るのを見て、

「此甕に水を充たしなせう。」

と命じました。

祝宴の席からもよく見える庭の隅に井戸がありました。僕達は其井から水を汲み、頭に載せて運び、石甕の縁の所まで充たしました。式を司る人や主なる客人達は、此頃ピラトとヘロデが不和になつた事などの話に氣を奪られて、庭の働さを知らないで居りました。イエスは又僕達に、

「之を酌んで式場に運びなさい。」

と申されました。僕達は驚き怪み乍らも、命ぜられたまゝに運んで注ぎました。井戸から汲んだ單の水にすぎないと思つて居りましたものが、盃に注がれると血よりも紅い

葡萄酒ではありませんか。夫を飲んで見た祝宴の司は、食卓の中央に居た花婿を呼んで、
 「世の中の人々は、始めには良い酒は出しても、酣なる頃には悪い酒を出しますが、
 貴殿は今迄良い酒を蓄へて置かれた、實に感心な事です、」
 と褒めました。花婿は水から變つた葡萄酒を味ひながら、

「此酒を持つて来たのは誰ですか？」

「何人ですか分りません、」

夫から僕や他の人々は、預言者イエスの命によりて、六つの水甕に縁まで水を充たしました。が、酌んで見た時には、皆酒に化つて居た事を話しました。人々は非常に驚きました。祝宴の司は、

「大なる預言者が此處に居られたのを、私達は知らなかつた、」

と叫びました。皆人は立つてイエスを讃めやうとしましたが、彼は居りません、既に外に出て、淋しい庭の木蔭に居られたのです。

私は其處に従いて往き、彼の足下に跪つて禮拜しながら、彼自身に就て語らるゝ

種々なる事、彼が眞に神の子キリストである事をも伺ひました。然し之等の事どもの中で、彼が苦難を受けられ、終りに高く崇められる事の他は、私にはまだ理解のできぬ點もありますから、委細は申し上げられません。」

かう書いてからヨハネはマリアに向つて、「イエスのキリストたるを疑ふ勿れ、彼がカナに於て水を葡萄酒に化へたことは、彼が神の力をもち給ふ公然の證明である。祝筵に列つた人々は皆彼を信じ、彼の評判はガリラヤ、サマリヤに迄廣がつて居る。彼は私にも申されましたが、近くエルサレムを訪うて、神の子たる事を公然に宣言されるさうです」と、其手紙を結んでありました。

以上はマリアの許嫁ヨハネの手紙の要旨であります。私が之を書送るのは、父上様として、イエスは今や甚大なる世の注意を喚起して居る事、彼が弟子を有つて居る事、彼は貧賤の者ではなく井戸の水を葡萄酒に化へる神の力を有つて居らるゝ事など、を知らしめんがためであります。父上様は此手紙から、少くもイエスはサレバタの寡婦の子を癒したエリヤに劣らない、預言者の一人である事は御承認なさらねばなりません。

せん。もし此事を御認めになれば、彼は善人である事も否まれないでせう。而してイエスがヨハネに告げられた如く、彼がキリストである事も同時に肯入れられねばなりません。

イエスを預言者であると信じながら、彼が夫以上の者であるといふこと、メシヤであるといふ事を拒む理由がありますか。父上様、娘として親を追究する無禮の罪を許して下さい。之はたゞ父上様にも、彼を信じて頂きたい至誠から申上げるのです。彼の善良な學者ラビ、アモスの如きも、今や半ば彼の弟子となつて居ります。イエスがエルサレムに來られた時に直接イエスの尊い御教を聞かれたならば、凡の偏見を捨てて彼に従はるゝに相違ないと思ひます。

カナに於ける奇跡の噂がエルサレムに傳はつて、市場や神殿に迄も、容易ならぬ感動を起しました。ラビ、アモスは先刻神殿から歸つて來て、三十人の祭司達が、預言の書を取つて、キリストの出現について研究して居たと話しました。

貴殿の愛する娘 アデイナ

第十四信

親愛なる父上様。

日々自身が預言者たる證據を現はし、又神と共にある事實を示して居る、ナザレの不思議なる青年を評價せしむるために、其名聲を委しく知らせよとの御言葉でございました。エルサレムに參る旅人の中で、何か彼の奇跡、或は驚くべき働きの消息をもたらさぬ者はありません。彼のエルサレム訪問は遅れましたが、彼は會堂に於て、地上に神の國の來たこと、自身が眞の神のメシヤである事を話すさうでございます。

彼の知慧、聖書の知識、教訓と奇跡の噂は、國境を越えてシリヤに迄も廣まりました。否、シリヤのみでなく、遠いダマスコからさへも、彼の癒しを乞ふために、貧富の別なく病人を伴れて參ります。而して來た程の者は、惡魔につかれた者でも、狂氣でも、熱病でも皆癒されます。彼が往く所には數千の人々が集まつて來ます。ピリピの役人の如きも、彼が遠くから發した一言で息子の病氣を癒された事から、一層確信

を増し、馬車を以て駈つけ、群衆の前に跪づいて、もう一人の熱病の子を癒さるゝやうに願ひました。私が今この手紙を書いて居る時にも、到底恢復の見込がないと曰つて、醫師に捨てられたエルサレムの富豪が、寢床のまゝ彼の許に運ばれて行くのが見えません。

全エルサレムの話題は、殆ど彼の不思議な働きのみによつて居ります。私の宅の向側の荒屋に住む籃を造る人がありました。彼は病氣のため十二年來足が立たないのです。是迄屢々各地の醫師へ往つて治療の術を盡しましたが効果がありません。彼はイエスの評判を耳にして胸を跳らして居りましたが、愈々其奇跡を求めて往かうと決心しました。或人は彼の希望を嘲りましたが、彼は、イエスは必ず癒して下さるといふ信仰を持ち、二人の人を頼み、五日を費してガリラヤに往くだけの金を得やうと人々に乞うて居りましたが、遂に目的を達して彼の地に往き、三週間の終りには、丈夫な體で、真直に堂々と歩いて歸つて來ました。全市の人が彼を圍んで驚いて居るのを見て、彼は一伍一什を物語りました。「カペナウンに着いた時には、數千の群衆が彼

を繞つて居て容易に近づけなかつた。待つて居る中にイエスは病人を癒しながら私に近寄つて來られました。其前に平伏して居た私に向つて、唯一言、「私を見よ」と仰せられました。凝然と見つめましたところが、「御身は大なる信仰を有つ、御身の信するが如くになります」と力強い語で申されました。忽ち私の膝關節に力が加はりました。痛みも苦みもなく容易く立つ事ができました。私は夢みたやうな喜びを以て彼の前に平伏して居る間に、推迫る群衆のために彼の姿を見失ひました。然し私はダビデの子を讚美せずには居られませんでした。」

此男は丈夫になつて近所を歩いて居りますから、私と毎日逢ひます。然し此の如きは數千の中の一例にすぎません。ヨハネは毎日イエスに従いて歩いて彼のなさる事、話さるゝ事を見聞して居りますが、此頃次のやうな事をマリアに書送りました。

「ガリラヤの各地は勿論、デカポリス、エルサレム、ヨルダンの彼方、小アジアからさへも病人が參ります。主は安息日には會堂で聖書を讀んで人々に教へられますが、彼が會堂を出る時には、門前には病人が列をなして待つて居ります。夫は悲惨で

又崇高な光景でありました。人々はイエスの姿を見るや、「来た！来た！」と口々に叫ぶのであります。彼は病児を看護する母のやうな眼で、此光景を見て居られました。が、やがて彼等に近づき、一々手を伸べて病人に觸れ、悉く癒されました。彼の去られた後には一人の病人もなく、群衆は感極まつて涙ぐみながら、神を讚美するのでありました。イエスに従いて来る群衆は非常に多くありました。二三日間疲れを休めるためには、何人にも知れないひそかな所に隠れなければならぬ程でした。さうした時、私達彼の直弟子は、彼から個人的に教訓と恩恵とを受けられます。然し長くは人々から離れて居られません。人々は何處からとなく彼を捜し出して、其休みに場に入して来ます。何といふ奇妙でせう、彼の手には神の力があります。彼が聲を出せば、權威ある王達も其前には力がありません。夫にも拘らず彼は落着いて謙遜です。あゝ何たる謙遜でせう。私達は彼を見て愧ぢ、而して平和に幸福に過して居ります。彼は又多くの時を、彼が父と呼ぶ神に向つて、唯一人祈るために費して居られます。彼の如き人は、二人と地の上には居りません。親しく深く彼を知つた私達は、至純の愛と聖

潔との結合した彼の人格を、恐れ畏んで居ります。彼を主と崇めると共に、兄弟のやうに愛して居ります。』

私がエルサレムでイエスに逢うた時は、彼の教訓と奇跡とに就て、特別に注意した事を書きませう。彼は果してベテレヘムで生まれたか、其母マリア、父ヨセフが、果してダビデの裔であるか否かといふ事は、久しい間神殿の學者達によりて研究された結果、事實に相違ないと此頃證明せられました。猶父上様御承知の祭司ピネアスは、彼が幼年時代、ヘロデ大王の治世にエルサレムに居た時に、學識深い三人の博士達が尋ねて来た事も證明しました。其一人はベルシヤから、一人はメディアのグレンシヤ州から、他の一人はアラビヤから來まして、黄金、乳香、沒藥などを献げた事も明かになりました。此三人の博士達は、各々異なる道を進み、異なる門から入つて來て、三人がヘロデの宮殿の前で逢ふまでは、互に其目的を知りませんでした。之等の人々は各々セム、ハム、ヤベテの三種族を代表して來たのであります。夫は全地の人類が、小兒イエスに於て、世の救主として彼を認める事を示したのであります。

ヘロデ王はこの三人の旅人が王國を訪うた理由を尋ねるために人を遣りました。ピネアスは「彼等はユダヤ人の王として、生れ給ふた王子を拜むために來ました。私達は東の方で彼の星を見、彼を拜まうと思つて來ましたと答へた」と記して居ります。なほピネアスの記録の中には、「こゝに於て王は祭司の長、民の學者達を王の會議所に集めて、

「汝等神の律法と預言とを研究し、キリストは何處に生まるかを調べて我に告げよ、貴き東の博士達は彼を拜まうとして來て居る。彼等外國人より我等の愚を笑はれぬやう、彼等に正しい答をせよ」といふと、二三の主なる祭司達が起つて、

「王よ、預言書を読む凡人の人は、メシヤはベテレヘムの町、ダビデの家から來る事を知つて居ります。ユダヤの地、ベテレヘムよ、汝はユダヤの郡中にていと小さきものに非ず、我イスラエルを牧ふべき君其中より出でん」と、此通り記してあります」と申し、問題は決しましたから、ヘロデは會議を解散し、自分の室に歸つてから、何

時頃其星が現れたかを尋ねるために、使者を博士達に遣つて、なほ

「貴き旅人等よ、幼兒を尋ねるならばベテレヘムに往きなさい。もしも彼を見出されたならば其所在を知らして下さい、私も彼を拜みたいと思ふから」

と曰ひました。三人がヘロデの前を去つた時はまだ暗くありましたが、東の方で見た星が彼等を案内して、ベテレヘムの町まで伴ひ、賤しい家の上で止まりました。彼等が其家の中に入った時、星の光線はヨセフの妻マリアの抱いた嬰兒の上に射して居りました。三人は直に夫を認め、イスラエルの王子として跪つて拜し、寶の盒を開いて、携へて來た黄金、乳香、沒藥などを献げました」とあります。ピネアスはカヤバから、どうして其事實を知つたかと問はれた時、「彼はイエスを拜まうとして來た博士達を見やうとの好奇心に驅られ、王の殿からベテレヘムまで從いて往つて、彼等が献物をする所まで見ました。若も夫が疑はしいと思ふならば、今エルサレムに住んで居るヘブル人の中で、ヘロデの命を受けた士官エレミヤが、其部下の兵卒をしてベテレヘムの當歳の嬰兒を殺させたのを見た多くの人が居ります、尋ねて見なさい」といふとカヤバは、

「何故そのやうに子供を殺したのか？」

と問ふとピネアスは答へて、

「王は自分の悪事を記して置きません。ヘロデは、其事が民の憎悪の他何も得る所のなかつた事を知つて、事實を黙殺させました。三人の博士達はエルサレムに歸つて報告せずに、他の道から歸つてしまひましたから、ヘロデにはイエスの所在がわかりません。それでペテレヘムに居る嬰兒を皆殺せば、イエスをも亡き者にされると思つたのでせう。然し神の力ある保護により、嬰兒は無事に免れました。」

「御身も彼を信ずるか、」

と云ふと、ピネアスは、

「私は先彼を見、彼に聞いて、若もメシヤたる證據を見せるならば、喜んで信じて拜みもしませう、」

と答へました。ラビ、アモスは此時言を添へて、

「そこで或人はイエスをキリストだと曰ひ、他の者はピネアスを石にて打殺すべしと叫んで、一騒動が起りました。」

父上様よ、イエスがメシヤであるといふ證據は、かうして日に／＼多くなりまします。彼の嬰兒時代の事はたしかに彼の神性を證明します。東の方の三人の博士がペテレヘムに去つて三日の後、ヘロデの命を受けて町の嬰兒を悉く虐殺した當時の隊長エレミヤは、今白髪の老人となつて居ります。父上様、私はイエスがメシヤである證據を、簡単な項目に分けて申上げませう。第一は彼が最初の神殿詣の時、シメオンとアンナとが彼を拜して、其將來を預言した事、第二は星が博士達をペテレヘムに導いた事、第三嬰兒時代の不思議な生立、第四バプテスマのヨハネの證言、第五バプテスマの時の神の聲、第六聖靈鳩の如く彼の上に下つた事、第七ガリラアのカナに於ける奇跡、最後に彼が到る所で行はるゝ奇跡、之等は彼がメシヤである事を、十分立證するではありませんか。彼はキリストではありませんか。

アデイナより

第十五信

最愛なる父上様。

先日の御手紙では「イエスの評判が勝つて来てから、ヨルダンの預言者は如何なりしか」といふ御尋ねでございましたが、夫に御答へ申すのが悲しうございます。貴殿は、彼が、後継者の権能と奇跡とが世の視聽を動すやうになつたのを、妬んで居るとの御考へらしうございますが、事實は全く反對であります。ヨハネは常に公に説教して、「我は後に来る者の履の紐を解く價値もない。彼は益々盛になり、我は衰へねばならぬ」と、幾度となく申しました。

ヨハネの使命はイエスの來ると共に終りました。其後間もなく荒野を出でエリコに參りました時、偶々そこへヘロデ王が來て居りました。ヨハネは公の場所や、市場や役所の前などで説教をいたしました。彼が熱心に話して居た時に、太守護衛の士官や兵卒も、ヘロデ自身も露臺に出て聽きました。預言者はヘロデ王を見るや、彼が兄弟ビ

リボの妻を嫁つた事は、律法に背いた罪惡であると、鋭い攻撃の鋒先を向けました。王は彼の公然の行爲にも怨恨の色を示しません。却つて宿に喚入れて種々の物語りをし、別れに臨んで多くの贈物を與へやうとしたが、ヨハネは受くる事を拒みました。其翌日、彼は使者を以てヨハネの説くメシヤの事を聞かしめました。其後ヘロデは我が領地に歸つて、ヨハネが公然自分等の結婚を非難したことを、自分はヨハネを敬愛して居ることなどを、妻ヘロデヤに話したところが、妻は非常に怒つて、もしも王が預言者よりも私を愛するならば、彼を獄に入れなければならぬと迫りました。王は心では望みませんが、止むなく命令を出して、城塞の獄に預言者を入れしました。此の聖人は、數週間、鐵鎖に繋がれて居りましたけれども、更に勇氣を落しませんでした。ヘロデは妻ヘロデヤの怒りを買はないで、どうかして早く解放してやりたいと、時の至るのを待つて居りました。其中に王の誕生日が來ましたから、彼は今日こそ妻の同意を得て、ヨハネを赦す事ができると思ひ、兵卒をして其事をヨハネに傳へさせました。祝宴の終りに、ヘロデヤと前の夫ビリボとの間に生まれた娘サロメが、皆の前で舞

踏をしましたが、其美はしい姿と巧な舞踊とは、客人達と共に飲み酔ふて居たヘロデ王をして、彼女が求むるものならば、たとひ王國の半でも與へるといふ約束をさせました。夫を聞いた彼女の母は娘を呼んで、命令的に耳打しました。娘は王に向つて、「バプテスマのヨハネの首を盆に載せて下さう、」
王は之を聞いて面色を變へ、強ふるやうに、

「御身の母がそゝのかしたのであらう。娘よ、王國の半を求めなさい。夫なら喜んで上げやう、而し私の誕生日に血を流してはいけなう。」

ヘロデヤは蔑んだやうな口調で、

「貴殿は自分でした約束を破るのですか。」

王は暫時沈思の後、

「一旦約束をしてしまつた。皆は夫を聞いた。致し方がない。御身の願ひを容れてやる。」

と答へて、護衛の士官に向ひ、獄に居るヨハネを殺し、其首を盆に載せて持來るやう

にと命じました。ヘロデは席に得堪へぬやうに立つて室内を歩き、他の客人達は沈黙を以て十五分程を過しました。守備兵の長官は、雄辯なキリストの先驅者の血に塗れた首を、眞鍮の大盆に載せたのを携へて私刑執行人を伴れて來ました。ヘロデは、窓際に立つて居た美しい娘を指して、

「彼女にやれ！」

と曰ひました。血に染みたる首の盆を受けた娘は、勝利の微笑を漏らしながら、夫を別室に居た母に渡しました。

ヨハネの弟子達はヘロデに往つて其死體を求めた時に、王は快く渡したけれども、ヘロデヤは葬らうといふ弟子達の願を拒み、「私は夫を犬に食せたい」と申したさうです。神を尊ばない女の復讐心は眞に恐ろしいものであります。

殺された預言者の弟子達は、道を傳へ病を癒して居るイエスの許に往つて、事細かに物語りました。ヨハネがマリアに書いた手紙には、「イエスはヨハネの死を聞いて深く悲み、荒野に去りました」とありました。バプテスマのヨハネの弟子は、或は其處

を立逃れ、或はイエスによつて兇暴なヘロデの手を防がうと尋ね求めて、遂に數百の教を聽かんとする者や、病を癒されんことを求むる者やに圍まれて居る彼を見出し、それは町から遠く離れた荒野の中でありました。人々はイエスに従ふ事のみを思つて凡を忘れ、食物を携へない者も多くありました。當時のことをヨハネはマリアに書き送つて、『私達イエスの弟子は、大方主は、人々をして自ら食物を買はせるために、立歸らせるだらうと思つて居りました所が、主は弟子達に向つて、

「彼等を去らせず、食物を與へなさい、」

と仰せられるのです、それでシモンが、

「主よ、何處から澤山の食物を求めませう。こゝにはたゞ五つのパンと、二つの小さい魚があるばかりです。』

と曰ふと、イエスは

「夫で十分、こゝへ持つて御出でなさい。』

私達はパンと魚とを取集め、イエスの前の岩の上に置きました。主は私達に命じ

て、群衆を草の上に坐らせました。人々が皆坐つた時に、主は五つのパンと魚とを取上げ、天を仰いで祝謝し、裂いて渡されましたから、私達は一々群衆に配りました。受取つては配り又配りして居る中に、神の預言者のなされる業に驚きました。裂いていくら與へても、盡きる時がないのであります。一時間程の中に、凡の人々が食飽きました。

悉皆食へ終つた時に、主の命令によつて、群衆が側にすてたパン屑を拾ひ集めました所、夫が十二の籠に満ちました。かうした不思議な業で養はれた男子は五千人程有つて、其他婦人や小兒も殆ど同數ほどありました。かく力ある御手を以て、數千人を飽すことのできる主が四十日四十夜食へずに荒野で飢えられたとは、どうした理由でせう。彼は苦むために神から遣されたと思はれません。此奇跡には餘り多くの實證人がありますから、打消すことはできません。イエスの名聲は日に／＼廣がるばかりです。毎日廊下や市場で逢ふ人といふ人は、

「彼は何か新しい奇跡をやりませんか、』

「あの力ある預言者が、別の奇跡をやつたのを聞かれませんか。」

と尋ね合ふのであります。唯祭司達のみは氣を悪くし、嫉妬心から悪ざまに彼を申し居ります。魔術を用ゐて奇跡を行ふとか、悪魔の王ベルゼブルの力を借りるとか、無法な事を言張る者もあります。昨日も、ラビ、アモスが祭司の長カヤバに向つて、イエスが其弟子達に追つたために海の上を歩まれた事や、一言で暴風を鎮めた事などを話しました所が、

「現在のやうに、彼が人心を收攬けるのを其儘に許して置いたならば、神殿の禮拜も終りとなり、犠牲を献げることと廢れ、人は皆彼にのみつくこととなるであらう、と、苦々しげに答へたさうです。」

前にも申上げたやうに、ヘロデ王はヨハネを殺しましたが、間もなくイエスの評判を聞いてヘロデヤに向ひ、

「之はバプテスマのヨハネが甦へつてあのやうな力ある業をなすのであらう。」と曰ふと、ヘロデヤは嘲笑つて、

「彼がもし死から甦へつたならば、私は六十回までも彼の首を斬つてやらう。」

と答へました。ヘロデはイエスをヨハネの甦へつた者に相違ないと思ひ、人をイエスの傍に送つて窃に保護をさせました。學者とレビ人とは、萬物を改めるメシヤの先驅者エリヤの如き人物とイエスを認め、或人は死より甦へつたイザヤ又はエレミヤと信じ、其他種々に信じて居ります。彼等は神の子キリストといふ一事の他は、凡を信じやうとして居ります。

父上様、貴殿は又、マラキの預言したメシヤの先驅者、エリヤは何處に居るかとの御問でございました。之にはイエス自身が御答へなさいました。叔父アモスがヨハネを通して彼に問ふた時に、

「エリヤは既に來ました。人々は彼に聽いたでせう。」

「夫はバプテスマのヨハネの謂ですか、」

「ヨハネはエリヤの靈と力とを以て來ましたから、彼は預言者と呼ばるゝのです。」之はイエスの御答でありました。

先日申上げた六人の弟子の事は重ねて書きまします。イエスは其後亦他の六人を撰み、凡十二人の弟子を常に其身邊に置いて特別に愛し、而して日々天の教義を傳へて居られます。なほ此他に、此處彼處と疲れを忘れて彼に従いて歩く數千人の中から、七十人を撰み、之を二人宛の組にして、ユダヤの町村に遣はし、天國の近づいた事、悔改めて神に歸る者に天國の來る事を宣べさせました。

御承知の如く、この寂しげな青年が、ヨルダンでバプテスマを受けて以來まだ一年を過ぎませんが、今や其感化は太守のピラトやヘロデ以上に及んで居ります。人々は彼を強いて王に立てやうとしました。彼は唯一人寂しい山に逃げました。世の指導者にならうとの野心は彼には毫もありません。彼にしてもし王國を建てると曰はるゝならば、夫は人々より受くるが如きものではないでせう。彼がもう王とならるゝならば、キリストとして立たるゝに相違ありません。何人も彼の運命を支配し、其榮光を制限する事はできません。私は既に彼が神の愛する者であるといふ上からの宣言を聞き、王の王としてシオンの聖座に即かれた榮光を見ました。

一般の人達は、イエスは此逾越節にエルサレムに來られると信じて居ります。私も彼に逢うたならば、愛と敬虔とを以て拜しませう。彼を見、彼に聞いてから、再び委しい事を御知らせ申しませう。何卒貴殿を愛する娘を御忘れないやうに。

ア デ イ ナ

第十六信

最愛なる父上様。

私は今机に向つて居りますが、市中は荒波のやうな騒ぎです。街路や遙か隔たる市場で群衆の騒めく音さへ聞えます。人民の騒擾は尋常ではなく、一揆が起るといふ噂が太守ピラトに達したので、彼の命令を受けた一隊の騎兵は、神殿を指して走つて行きます。然し之は羅馬政府に對する反亂ではありません。曾ては東方の主であり、神の撰民であつた私達の國民は、現に羅馬人から負はされて居る屈辱の鞭を取去らうともせず、卑屈にも服従して居ります。ユダヤの自由のために立つ者は果して誰でせ

う。新しい預言者イエスの異常なる働きによつて生じた騒動は、刻一刻猛烈になつて

一七〇

居ります。彼の名を口にすると、私の心は怪しく騒ぎます、あゝユダヤ人も異邦人も彼の前に平伏すでせう。私は少し詳細に光景を寫しませう。之は彼が神から受けた使命を證明する働きでありますから。

私は前の手紙で、この驚くべき人物は逾越節にエルサレムに来るかも知れぬといふ世の噂を申し上げました。彼が當地に來られたならば、逾越節夫自身よりも一層偉大な結果をもたらすであらうとも申して置きました。人々は新しい預言者と、其奇跡とを見るためにエルサレムに集まつて居ります。街といふ街は入京者で埋められて居るとラビ、アモスが申して居りました。

昨日私達一同が裏の泉水館の葡萄棚の蔭に集まつて、叔父アモスがエレミヤの預言書を開き、來るべきメシヤ(否、彼はもう來て居ります)に關して讀まれるのを聽いて居た時、突然マリアの従兄ヨハネが入つた來ました。マリアは面を潮紅めて其許嫁を歓迎しました。叔父アモスは彼を抱いて接吻し、而して私達の間に坐らせました。彼

は旅路の疲れも見え埃にも塗みれて居りましたから、僕を呼んで其足を洗はせました。イエスは今日ベタニヤの、マリア、マルタの家に着いて、親切な家庭で休んで居られるさうです。之を聞いて一同は非常に喜びました。殊に叔父アモスは深い満足を表し、同情に満ちた言葉で、

「彼がもしエルサレムに來られたならば、私宅に招きませう。神の預言者が私宅の閭を踰えて下さつたならば、家族はどんなに幸福でせう。」

マリアは興奮した面を若い預言者の弟子に向け、

「彼がもし御出でなさつたならば、逾越節の終るまで、私宅に滞在していたいませう。」

と熱心に申しました。ヨハネは非常に喜んで、

「私は愛する主に其事を話しませう。主は此市には宅も友もありませんから、喜んで御泊りなさるでせう。」

「友達が無い？其様事はありません。私達は皆彼の友達です、而して喜んで弟子

ともなりませう。」

と私が申しますと、ヨハネの眼は驚きと喜びとに輝きました。彼は叔父さんに向つて、

「何！アモス教師も？」

「然です、私も彼を神の預言者と認めやうと、其準備をして居ります。」

「彼は預言者よりも高く優れた御方です。預言者は決して彼の如き業を行ふ事はできません。凡の力は彼から出ます。ユダヤを旅行して居る間に私達の見た事を御實見になれば、貴殿も私と同じく、彼は人の形を取つて地に下つた神であると曰はるゝせでう。」

「青年よ、神を潰すことを曰つてはいけません。」

ヨハネはアモスの嚴なる言に頭を垂れましたが、而し確信する所あるらしく、

「何處にも彼のやうな人はありません。若も人の形を取つた神でなければ、天の力を受け肉體となつた天の使でせう。」

夫を聞いて私は、

「彼がもしメシヤであるならば、天の使ではありますまい。メシヤは悲みの人と明かに預言にありますから、彼は婦の子でせう、天の使ではありますまい。」

「さうです、貴女はよく預言を御存知です。私は、彼が神の子メシヤである事を確く信じます。彼は實に人よりも高く、神よりも低からぬ御方です、私達は驚き愛し、且拜して居ります。或時は愛する兄弟のやうに抱き合ひたく感じ、或時は前に平伏して拜みたく思ひます。彼の前に來た恐しい病人を、たゞ手を觸れた丈で、或は唯一言で癒し、頻死の病人が立處に清くなり、強くなり、彼の前で立つて歩くのを見ました。」

ヨハネが話して居る所へ、パリサイの富豪でニコデモといふ人が來て居りました。彼はヨハネの話の斷えた時に、

「私は今皆さんが御話のイエスを見ました。夫は彼が疲れを癒すために、ベタニヤで休んで居られた時の事です。他人の病を癒すことのできる者が、どうして其様に

疲れるのでせう、私は、醫者何ぞ自身を癒さざると申したいと思ひます。」
此の博學なユダヤ人の宰相が、白髪を撫でながら、疑深い口調でかう申して、ヨハネの答を待て居ります。

「夫はイエスの人格を研究なされば解ります。彼が他人の病氣を癒すのは自身のためではありません。彼は愛と同情のためにのみ奇跡の力を用ゐます。彼は一人して飢渴き苦んで居ります。私は彼が一言で、ある貴人の子の病を癒すのを見ましたが、其後彼は痛む頭を両手で抑へ、面色を失ひ元氣なく見えました。彼の愛の働きがいかに多くの力を費すかは、之でもわかります。或日シモンが、彼の疲れに沈んで休んで居らるゝのを見て、

「主よ、貴殿は他人に力を與へられながら、如何して自身は御苦みなさるのです？凡の人は生命の泉のやうに貴殿から力を受けられるのに、夫を賜はる貴殿が苦まれるのは如何した理由ですか？」

「他人に善をなすために與へられた天の力を、自身の疲れを癒すためには用ゐられません。私は自身苦む事によつて、他人を助けられるのです。」
と彼は答へられました。

之等の言葉を、諳誦するやうにヨハネの話すのを聞いて、一座の者は皆沈黙しました。涙は私の眼を曇らせました。傲慢なパリサイ人を見ると、彼は顔色を變へ、嚴肅口振で、

「彼が普通の預言者でない事は確實です、彼が此市に來られたならば、直接其口から教訓を聞きませう、而して力ある奇跡をたしかめませう。」

「彼は預言者か否かは今や問題ではありません。彼が多の病を癒したといふ事は、往昔の預言者の力と靈とを有つて居らるゝ證據です。残つて居る問題は、メシヤか否かといふ事です。」

アモスがかう曰ふと、ニコデモは靜に首を振つて、
「いや、メシヤはガリラヤから來ません！」

此時マリヤが頓狂な叫び聲を出しましたから、一同は吃驚して何事かと入口を見ると、

彼女は私達の知らない青年の手を執つて來ました。

「御父さん！愛する御父さん！」

叔父さんは恰で夢でも見たやうに、自分の眼を信ずる事のできない程驚いて、青年を見詰て居りましたが、やがて嬉しさに堪へぬやうに、若い客人をひしと胸に抱き、涙に咽んで聲も出ません、

「我子よ、失ふたと思つて居たのに、再び見付出した。之は主のなし給ふたのです、何といふ不思議なことでせう！」

ヨハネも亦起つて新來の客を抱きました。マリサイの幸は、怪みながら黙つて立つて居ります。私は此の意外な状態を見て呆氣に取られて居りました。マリアは走つて來て、涙に濕んだ黒い眼を輝しながら、

「之は、私の前に失つた兄弟です、ベンヂヤミンです」

と曰ふから私は應へて、

「兄弟を御有の事は遂聞きませんでしたでしたが、」

彼女は感に堪ぬごとく、

「七年前、彼は狂氣になつて、他の悪魔につかれた人と共に、町端れの墓場に住んで居たのです。長い事少も消息を聞きませんから、既う死んだと思つて居たのでした。私は幻影を見るやうな心地がします。彼の男らしい立派な風采を御覽なさい、彼が正氣であつた時のやうに、賢さうに笑つて居ります。アレ、マア。」

人々は怪訝な面をして居りますと、ベンヂヤミンは、

「確に私です、私を愛して下さる方の息子です、兄弟です、私は正しい心と健康とを有て居ります。」

「オ、息子よ、誰が御身をよくしたか、」

消え失せるのを心配するやうに、ラビ、アモスは確とベンヂヤミンの手を握つて、唇を顫はしながらから尋ねますと、

「夫は尊い神の預言者イエスです。」

其答には嚴肅な満足がありました。

「イエス！」

私達は一齊に叫びました。ヨハネは明瞭な言葉で、

「私も確にさう思ひます。ニコデモ教師、貴殿も此青年を御存知でせう。子供の時のことからよく御承知の筈です。彼が狂氣になつて墓場に居たのも御覽でせう、然るにかうして歸つて來ました。之でもイエスはキリストか否かと疑はれますか、」

ニコデモは黙して答へません。然し其表情で信じた事を見受けられました。彼は感動したやうにして青年に向ひ、

「御身は如何してよくなつたか？」

と問ふと、ベンヂヤモンは

「今朝ベタニヤの近傍を彷徨ふて居りました時、夥しい群衆が近づいて來ました。見れば其中に一人不思議な人物が居ります。彼は私を捉へやうとするらしく思はれましたから、私も、七つの悪魔につかれた友と共に、彼を打碎いてやらうと、大な石とナイフトを携へて彼に近寄りました。群衆は恐れ道を開き、助けを呼んで居り

ます。然るに彼は動かずに唯一人立つて待つて居ります。私達は彼と數尺しか隔てぬ程に進み、彼を打倒さうと身構へました。其時彼は手を舉げて、「静まれ！」と申しました。同時に私達の手も足も動なくなりました。彼は神の子で、私達を滅ぼしに來たと思ひましたから、口に泡を吹ながら咆哮りました。彼は見えない悪魔に命ずるやうに「早く人々から出で去れ」と申されました。此言葉を聞くと共に恐しい痙攣を感じ、全身悪魔に打たれるかと思ひました。イエスは近づいて私の肩を軽く叩き、「起よ、子よ、御身は全くなれり」といはれ、私の心から一片の黒雲が立上るやうに見え、私の靈魂には光榮の曙が來ました。涙を以て過去七年間の暗い生涯を洗ひ、彼の前に平伏し、彼を抱いて接吻けました。」

ベンヂヤモンの話を聞終つて、今更のやうにイエスの力に驚き、大なる預言者を賜うた神を頌めました。私は此の手紙を、エルサレム全市を動かして居る一大騒動の暗示を始めましたが、昨日泉水館で起こつた事をあまり長く書きましたから、今日は之で筆を擱き、次の便で此夕の出來事を御知せ申します。さらば祖先の神、父上様と共に

在して、父上様及び、聖き約束の國民を祝したまはん事を。

貴殿の愛する娘 アデイナより

第十七信

親愛なる父上様。

全市騒動の中から上げた先日の手紙で約束したことを、今日は委細御知らせ申さうと思つて筆を執りました。逾越節の朝、ガリラヤの預言者がエルサレムに入つた時の光景は、實に空前の壯觀でありました。店からも家からも人々は彼の居る方へと雪崩を寄せます。マリアと私とは一種の期待を以て屋上に登りました。見渡す限りは悉く人の頭と海でありました。而して其處からは岩に當つて碎ける怒濤のやうな叫びが聞えます。私達のところから市の門もよく見渡されますが、其處も亦何事かを見やうとする群衆で眞黒です。忽ち其處から數千の人々が一度に叫ぶやうな聲が聞え、其聲と共に群衆は後から後からと押寄せます。従姉マリアは息をはづませて、

「預言者が門を入つたのでせう。人々はどんなに彼を崇めるでせう。屹度王様の歡迎のやうでせう、」

と申しました。私宅の前は本道でありますから、イエスの御通行を見られると思ふて居りました所が、彼は先モリヤ山の神殿に登られましたから、私達はいたく失望しました。主の神殿に登られる所が、一寸見えませんでした。

イエスの側近く進んで行くのはヨハネであるとマリアは申します。群衆の頭は神殿の弓形門のためにかくれましたが、數千の人々は次から次と追うて往きます。豫て度々御知らせ申した羅馬の青年士官は、市の秩序を保つために、四百の騎兵を率ゐて進んで往きました。

入れるだけの群衆は正門から入つてしまつて、暫く靜になりました。マリアは、

「多分彼は禮拜をして居るか、犠牲を献げて居るのでせう。」

と曰ひ、私は、

「群衆は彼の説教を靜に聽いて居るのでせう、」

私達が話して居る時に、神殿の脇から、不規則の関の聲がドツと起りました。門外の群衆も夫に應じました。其物凄さは言語に盡されません。

さうして居る中に、丘の脇の石垣から下る者があつて、混雑は一層加はります。羅馬の騎兵は取締のために駆登ります。群衆は押進み、後戻りし、渦を巻き、宛も暴風の荒狂ふやうです。私は不安の胸を抱いて、どうなる事かと、たゞ眼を睜つて居りました。マリアは喪心したやうに私の側に踞まつて居ります。夫から十五分も経つたと思ふ頃、逾越節のため、昨日ナインから出て来たベン、アゼルが這入つて来て、先程生じた異常の光景について語りました。「預言者イエスの入つて来た時、神殿の庭は商人や兩替人や、犠牲の獸畜を賣る者を以て満たされ、神聖な場所の一部は柵で劃りをつけ、其中は羊や家畜の小舎にしてありました。神殿の奥に往く道は、小舎や仲買人の机などで妨げられ、右に左に迂回をしなければなりません。イエスは祭司の庭の入口で、祭司自身が兩替人の机を守つて居るのや、レビ人が犠牲の羊や鳩の番をして居るのを見て居りましたが、其眼には威嚴と力の耀きが加つて来ました。人々は片唾

を飲んで、將に何事か始めやうとするイエスを凝視して居りました。賣買は半にして中止しました。賣る者も買ふ者も、魔力に打たれたやうに、恐れと虔みとを以てイエスを見て居ります。彼の近くに居た群衆は、見えない力で弾ね返されるやうに、後へ後へと下り、遂には弟子ヨハネが唯一人だけ残りました。」

「一分間前までは、神の名を呼ぶ者、叫ぶ者、泣く者、走る者、金銭を算へる音、數千人の話聲などで、耳も聞えない程であつたのが、何たる驚くべき變化でせう。賣買人の騒ぎも静まり、家畜の呻く聲も止んで、たゞ折々ククと鳴く鳩の聲が聞えるばかり、無心の動物迄も或偉大な超自然に壓へられたやうに、満場死の如き静寂となりました。風波の荒んで居た海が、深淵の淀みに還つたやうです。夫は氣味悪い沈黙で、心臓の鼓動も一時止まつた程でした。預言者は今にも恐ろしい事を始めるだらうと、群衆は待構へて居りました。イエスの立つた神殿の石段は王座の如く、其前に集うた數千人は、今にも審判れんとする状態でありました。時に私の傍に居た一人の青年が、急に刺されたやうな叫びを擧げ、喪心して大理石の石壘に倒れた爲めに、沈黙は

一時破られましたが、群衆はなほ大磐石で壓付けられたやうな心地で、静まり返つて居りました。突然、往昔シナイ山で律法を授けられた時に鳴つた喇叭のやうな、權威ある明亮な聲が聞えました。

「我父の家は、祈りの家と呼ばるべしと記されてあるに、汝等は盜賊の巢となした。」夫から彼は鋪石の上にあつた繩を拾ひ上げ、それで造つた鞭の如きものを提げて進みました。彼の前に兩替をして居た祭司、レビ人、畜類を賣つて居た者共は、皆恐れ逃げて惑ひました。預言者は、

「穢はしき物を取去れ、我父の家を賣買の場所としてはならぬ、」

其時のやうな狼狽混雜を見た事は曾てありません、私は其恐ろしい渦巻の中心に近く居りました。金錢を置いた卓子が倒れて、金銀貨が其邊に散らばりますが、いくら貪慾な者でも落ちて居る貨幣を拾はうとする者はありません。たゞ押合ひ引合ふ群衆のなみになるがまゝになつて居ります。かく人々が恐れ周章たのは、彼の手にして居た鞭のためではなく、其面の威嚴に打たれたのであります。繩の鞭は、惡魔の國を滅す

ために、天の使の用ふる火の劍のやうに、人々は頭の上で電光の閃くのを感ぜました。やがて神殿は全く深められました。彼は神殿の主長の如く、殿かに立つて居られました。鞭はいつのまにか彼の手から落ちて、慈悲と憐憫とが彼の姿を包んで居りました。

然し私は長く此光景を見て居られませんでした。群衆は逃げやうとして周章狼狽き、私を推倒しました。其瞬間遂に彼を見失ひました。群衆は失神したやうになりました。前には槍をかざした羅馬兵が居り、後には祭司の列があつて、何方にも行かれませんが、悲痛と恐怖と憤怒との混じた叫びを上げながら、互ひに押合ひ踏み合ふばかりでした。」

ベン、アゼルは此物語を終た時に、「私はどうして此處まで無事で免れ得たかわかりません」と附加へました。ベン、アゼルの話が終つて、預言者イエスの力を驚いて居りました時、前の道路は我家に歸る人々で充たされてをりました。彼等は口々に、或は「恐ろしい預言者!」「羅馬兵!」などと叫びながら、洪水のやうに流れて往きます。

ベン、アゼルが話し終つた所へ、ラビ、アモスも神殿から歸つて來ました。其語る所によれば、イエスが唯一人、神殿の黄金の床の持主の如く立つて居た時に、祭司の長が其處に近づいて、何の權威を以て之等の事をなすかと詰問した所が、

「我父の殿を商賣の家としてはいけなす、」
と曰ひました。祭司は少し離れて、

「貴殿はキリストですか、」
と問ひますと、

「然りと答へても御身等は信じないであらう」

「貴殿が神から遣はされた事を證すために、何の休徴を見せて下さいますか、」
と問ふた所が、彼は茫然として居る群衆の方に手を伸べ、更に又胸に組んで、

「御身等は、私の天よりの力を認めませんか、私は此神殿を壊ちて、三日の間に再建せしめ、之は御身等祭司に對し、又全ユダヤ人に對し、私が天の神から來た證據であります。彼に命ぜられましたから私が行ふのです。」

こゝに大なる眩きが起りました。祭司の長アンナは多くの祭司達に向ひ、

「彼がもし此神殿を毀つならば、決して正しき人ではない。」

といふと、他の多くの人々は、

「もしも神の遣し給ふた者でなければ、彼が人々の上に行うた力は何處から來ましたか。」

「彼はベルゼブルに由りて行うたに相違ない。眞の預言者ならば神殿を毀たうとする筈はない。」

此時又もあれよ之よと騒擾が始まりました。祭司の長カヤバは一同に靜肅を命じて、

「貴殿は預言に記されたキリストでありますか、」

かう問はれたイエスは、高く手を上げながら、嚴かに、而も確然と、

「然です。私は神から來ました。」

アンナは聞いて驚嘆の聲を擧げ、

「彼は神を瀆す事を言ふた、神殿の神聖を瀆す者を早く立去らせなす。」